

よみがえる 氷河時代の 狩人



—— 平成20年度秋季企画展 ——



長野県立歴史館

長野県立歴史館平成20年度秋季企画展
 『よみがえる氷河時代の狩人』訂正表

ページ	箇所	訂正内容
8	表 層序区分の列最下段	琵琶湖底泥炭層→琵琶島沖泥炭層
12	13のキャップション	写真撮影: 芹沢長介氏を追加
12	14のキャップション	(右上・下段は芹沢長介氏撮影)→写真撮影: 芹沢長介氏
44	51のキャプション	りゅうきせんもんどき むもんどき 隆起線文土器→無文土器

平成20年度 長野県立歴史館 秋季企画展

よみがえる 氷河時代 の獵人



平成20年9月25日(木)~11月24日(月・祝)

- 主 催 長野県・長野県立歴史館
- 共 催 浅間縄文ミュージアム・野尻湖ナウマンゾウ博物館
星くずの里たかやま黒耀石体験ミュージアム
- 後 援 日本考古学協会・日本旧石器学会・長野県考古学会
NHK長野放送局・SBC信越放送・長野放送
テレビ信州・長野朝日放送・信州ケーブルテレビジョン
信濃毎日新聞社・朝日新聞社長野総局
読売新聞社長野支局・毎日新聞社長野支局
長野市民新聞社・更埴新聞社・FM長野・FMぜんこうじ
(財)八十二文化財団



長野県立歴史館

Nagano Prefectural
Museum of History

〒387-0007 長野県千曲市屋代清水260-6
科野の里歴史公園内

TEL.026-274-2000 FAX.026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.jp



前・中期旧石器ねつ造事件

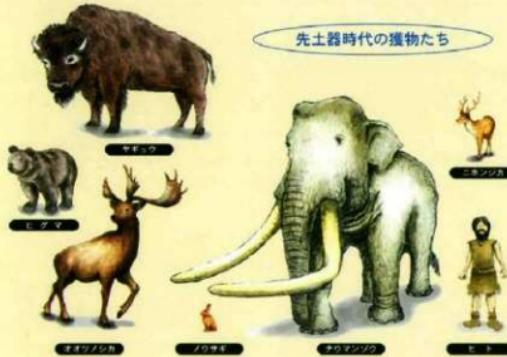
よみがえる氷河時代の狩人

われわれの最も古い祖先たちの時代を先土器時代（もしくは旧石器時代・岩宿時代）と呼びます。それは氷河期にあたる厳しい自然環境の中で生き抜いていた狩人たちの時代です。

2000年11月に「前・中期旧石器ねつ造事件」が発覚しました。それまで70万年前の原人段階まで遡るとされた遺跡は、その後の学界の検証調査で、すべてねつ造されていたことが判明しました。それでは、われわれの祖先たちはいつ頃日本列島に渡り住み、どのような生活をおくっていたのでしょうか。



先土器時代の自然環境



地球は温暖な時期と寒冷な時期を繰り返してきました。先土器時代の日本列島には森林が乏しく、草原に樹木が散在する現在の霧ヶ峰のような景観であったと考えられます。当時の人々とは、その草原で現在は絶滅してしまったナウマンゾウやオオツメシカを見つけ、狩りをしていたことでしょう。



最古の狩人を追う

1949年、群馬県岩宿遺跡で洪積層の堆積層である関東ローム層から石器が発掘され、日本列島の人類文化のはじまりは、氷河期まで遡ることが確実になりました。その後最も古の狩人の遺跡への探求は「前期旧石器存否論争」と呼ばれるほど、学界でも議論的でした。「ねつ造事件」の反省を踏まえて、いま新たに列島の人類文化のはじまりについて学界でも慎重に研究が進められています。3万年を遡ると考えられる石器群がその対象となりますが、年代観や石器の認定など研究者間でもなかなか一致を見ないのが現在の状況です。





野尻湖周辺の航空写真



西岡A遺跡の近縁系のナイフ形石器



日向町B遺跡の石片と砾石

狩人の集まる湖

3万年前頃になると、日本列島の各地で遺跡が数多く発見されるようになります。当時の狩人たちとは、重量のある斧形の石器と切れ味の鋭いナイフを持ち、ときに径數十メートルにもなる環状のムラを形成します。信濃町野尻湖周辺では多量の斧形石器や環状のムラが発見されました。

また、2万年前頃は日本各地の特徴を備えたナイフ形石器が発見されます。野尻湖は日本各地の狩人たちが行き交う場所だったのでしょうか。

長和町A遺跡の石片
B地點大型尖頭器
(市教育委員会蔵)

北海道日高遺跡群の大型火照器(北海道遺産文化財センター蔵)

鋭い割れ口をもつ黒曜石は、最も優れた石器の材料として利用されてきました。信州の黒曜石原産地は本州でも最大級の規模をもち、各地へもたらされました。その流通のあり方が明らかになってきたのは近年の研究の大きな成果の一つです。一方、北海道の黒曜石は原石が大きく豊富に埋蔵され、信州とはかなり違う利用状況であったようです。二つの産地の黒曜石の違いを見比べてみてください。



北海道赤石山B号沢の黒曜石露頭



信濃町足尾山B遺跡の石片と土器



南箕輪村仲子安遺跡の大型石片と石刃



縄文文化の芽生え

氷河期末、気候も温暖化していく中で、狩人たちの道具にも大きな変化ができます。日本列島は二つの特徴的な石器文化があらわれます。細石器と呼ばれる小さな石のカミソリを用いる集団と大型の石槍や石斧をもつ集団が登場し、それぞれの集団はついに土器を手にするようになります。



長崎県佐賀穴の細石器と土器(東北大学考古学研究室蔵)



講座

- ◆10月18日(土)午後1時30分～「日本歴史のはじまりを探る」
- ◆11月15日(土)午後1時30分～「狩人の集まる湖」

氷河時代の狩人に挑戦
一黒曜石で石器を作ろうー

- ◆1回目 10月13日(月・祝) ◆2回目 11月9日(日)
- 各回とも午前10時～午後2時 要予約・参加費無料

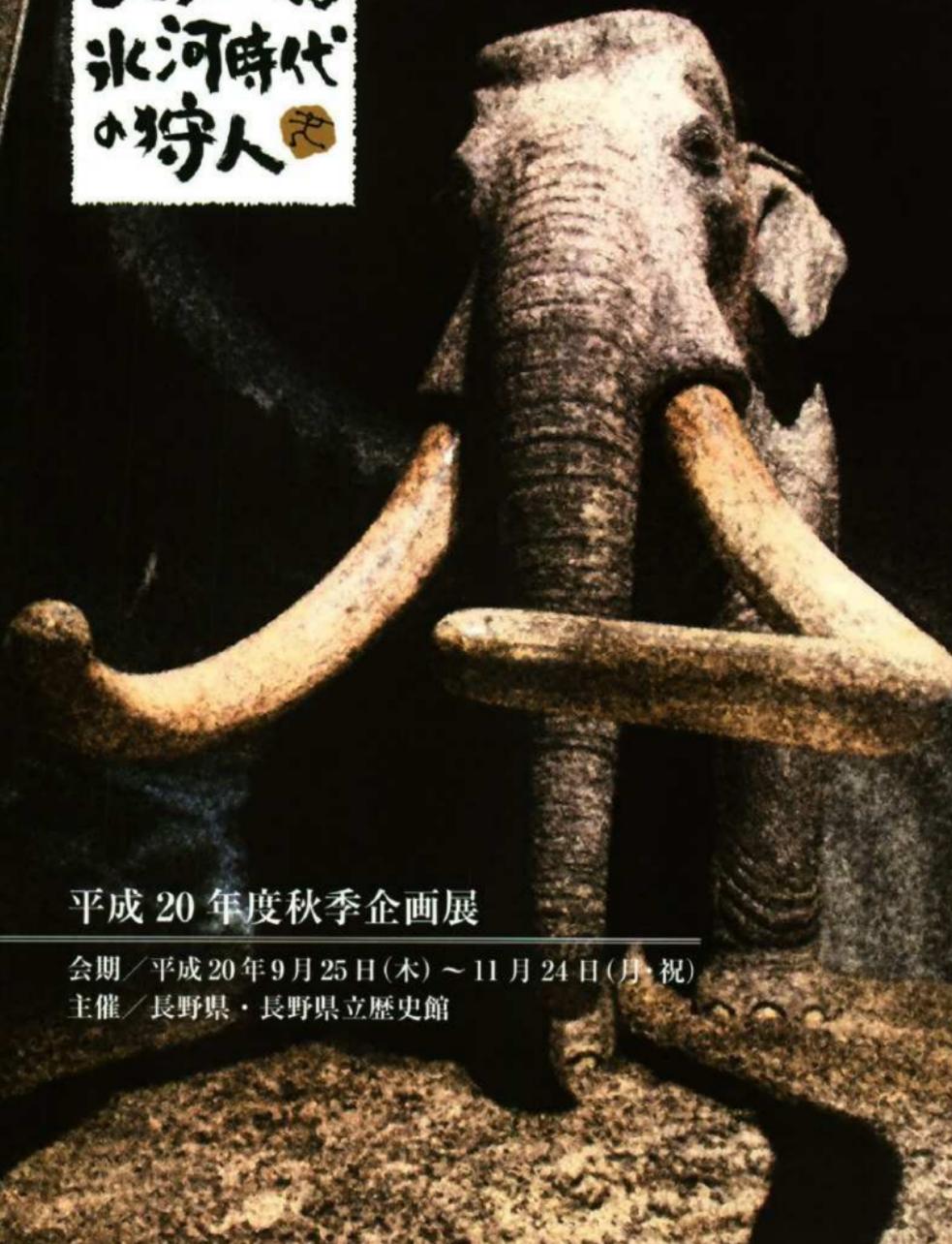
※「催しもの内」とは時間が変更となりましたのでご注意ください。

講演会

- ◆10月4日(土)午後1時30分～「氷河時代狩人の生活と集団」
講師：岡山大学名誉教授 稲田孝司氏
- ◆11月1日(土)午後1時30分～「日本旧石器時代研究と信州の遺跡」
講師：首都大学東京教授 小野 昭氏

よみがえる
氷河時代
の守人

史



平成 20 年度秋季企画展

会期／平成 20 年 9 月 25 日(木)～11 月 24 日(月・祝)

主催／長野県・長野県立歴史館

平成 20 年度秋季企画展
よみがえる氷河時代の狩人

会期 平成 20 年 9 月 25 日（木）～ 11 月 24 日（月・祝）
会場 長野県立歴史館企画展示室
主催 長野県・長野県立歴史館
共催 浅間縄文ミュージアム・野尻湖ナウマンゾウ博物館
星くずの里たかやま黒曜石体験ミュージアム
後援 日本考古学協会・日本旧石器学会・長野県考古学会・NHK長野放送局・SBC信越放送・長野放送・テレビ信州・長野朝日放送・信州ケーブルテレビジョン・信濃毎日新聞社・朝日新聞社・長野総局・読売新聞社・長野支局・毎日新聞社・長野支局・長野市民新聞社・更埴新聞社・FM長野・FMぜんこうじ・（財）八十二文化財団

秋季企画展講演会

- 1 「氷河時代狩人の生活と集団」
日時 10 月 4 日（土）午後 1 時 30 分～
講師 岡山大学名誉教授 稲田孝司氏
- 2 「日本旧石器時代研究と信州の遺跡」
日時 11 月 1 日（土）午後 1 時 30 分～
講師 首都大学東京教授 小野 昭氏

企画展講座

- 1 「日本歴史のはじまりを探る」
日時 10 月 18 日（土）午後 1 時 30 分～
講師 当館専門主事 大竹憲昭
- 2 「狩人の集まる湖」
日時 11 月 15 日（土）午後 1 時 30 分～
講師 長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事 谷 和隆氏
(会場 いずれも長野県立歴史館講堂)

開催にあたって

数万年の単位で寒冷期と温暖期が繰り返した氷河時代は、およそ200万年前ころに始まったといわれています。寒冷期には地球全体の氷河が発達し、海平面は現在より100m以上低く、平均気温も現在より7度から10度も低かったことがわかっています。日本列島には、この氷河時代に人びとがやってきました。日本列島最初の人類の歴史を先土器（旧石器）時代と呼んでいます。

長野県では、昭和22（1947）年にナウマンゾウの歯が発見されて以来、野尻湖周辺の遺跡の調査によって、ナウマンゾウやオオツノシカなどを狩猟対象としていた氷河時代の人びとの生活がしだいに明らかになってきました。

一方、平成12（2000）年に発覚した「前・中期旧石器ねつ造事件」は、日本の先土器時代研究への信頼を揺るがすものとなりました。その後おこなわれた検証調査によって、事件の対象となった遺跡と遺物のほとんどがねつ造であることが判明したのです。先土器時代の研究者はこの事件を教訓として受け止め、真摯な姿勢で研究を続けています。

今回の企画展では、ねつ造事件の反省を経て、わが国の先土器時代研究が何を調べ、何を明らかにしてきたのか、そして、こうした古い時代に人びとはどのような環境下で、どのような生活をしてきたのかをご紹介したいと思います。

幸いにしてその後、長野県を含む全国各地で、学問的な評価に耐えうる先土器時代の遺跡と遺物が発見されつつあります。そのなかでもやはり野尻湖遺跡群は、世界有数の規模と特徴を備えていることが明らかになってきました。また、和田岬周辺の黒曜石は、優れた石材として列島各地で広く利用されています。寒冷な氷河時代が終わると、日本では世界で最も古い可能性がある縄文土器を生み出します。こうした文化の変遷も今回の企画のポイントといつてもよいでしょう。

21世紀の現在、世界的に環境への関心が高まっています。研究者たちの努力によって、過去の環境が少しずつイメージできるようになってきました。過酷な環境変化の中での人びとの生活を知ることは、今に生きるわれわれにとっても大きな示唆を与えてくれるに違いありません。本企画を通じて多くの方がたが、過去の人びとが残した生活の痕跡に関心を持ち、環境と人間との関係に思いをはせていただければと考えております。

最後になりましたが、本展の開催にあたり貴重な資料のご貸与など、ひとかたならぬご協力を賜った諸機関および関係各位に対し、改めて厚く御礼申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

平成20年9月

長野県立歴史館

平成 20 年度 秋季企画展図録 よみがえる氷河時代の狩人

開催にあたって	3
目次	4
展示資料の出土した遺跡	5
狩人たちの道具の移り変わり	6
プロローグ	7
1 先土器時代の自然環境	8
2 最古の狩人を追う	10
3 狩人の集まる湖	19
4 黒曜石を求めて	31
5 繩文文化の芽生え	39
展示資料一覧	58
主な参考文献	60
謝辞・協力者一覧	61

■凡例

- 1 この図録は、平成 20 年 9 月 25 日（木）から 11 月 24 日（月・祝）まで開催する企画展「よみがえる氷河時代の狩人」にあわせて作成された図録です。
- 2 この図録の資料番号は出品番号と一致します。資料の掲載順序は会場の展示順と必ずしも一致していません。
- 3 国録掲載の資料が一部会場に展示されていない場合があります。
- 4 この図録の刊行に際し、福田孝司氏・小野昭氏・谷和隆氏からご寄稿をいただきました。
- 5 本企画展で扱う時代の呼称については「先土器時代」、「旧石器時代」、「岩宿時代」がありますが、「先土器時代」を用いました。ただし、ご寄稿文、資料の性格から他の呼称を用いている場合もあります。
- 6 この展覧会の企画は、大竹憲昭・谷和隆（旧職員、現 県教育委員会文化財・生涯学習課）が担当し、図録の執筆および編集は大竹憲昭・西山克己・原明芳・村石正行（いずれも当館総合情報課）がおこないました。写真は所蔵者等に提供いただいたほかは、当館職員が撮影いたしました。

展示資料の出土した遺跡



() 内は展示資料番号

狩人たちの道具の移り変わり

時期 (年数) 1.3万	縄文時代草創期(星光山荘B)	武藏野台地 野川流域人発考古G	展示コートナード 色	展示資料の時期
III 第V期			XII & IX モヤ	夏光山荘B 前田耕地 中島B 大平山元 福井洞穴 鹿沢B 神子坐 下茂内 失出川 白瀬
IV 上	尖頭器石器群(上ノ原II) 	縄石刃石器群(仲町BPS) 	VII 上II最下部	七ヶ原 杉久保 西岡A 上ノ平C 真ノ木 谷川
IV 中・下	尖頭器石器群(西岡IIIa) 	杉久保系石器群(七ヶ原II) 	IV上 VI 上II下部	鹿山 男女倉 長原 南花田
Va 第II期	尖頭器石器群(東素IIb) 	国府系石器群(西岡IIIb) 	IV下・V V 上II最下部	裏ノ山 東裏 寺尾
Vb 第一期	台形石器群(仲町JS) 	茂呂系石器群(裏ノ山II) 	VI III II・IX・X 黒色帶上部	大久保南 日向林B 岩宿 道平日 富士石 真ノ木 湿ヶ瀬 がまん酒 竹子瀬 石子瀬 中山谷 竹佐中源 金取野 立が轟 星 早水台 早水台 丁村 マドラス
Vc	岩原石器群(日向林I) 	台形+石刃石器群(貴ノ木II) 	II I II	

プロローグ

「前・中期旧石器ねつ造事件」

2000年11月に発覚した「前・中期旧石器ねつ造事件」は考古学界のみならず、社会的問題になるほどの大きなかつ衝撃的な事件でした。70万年前まで遡るとされた日本列島の人類文化のはじまりは、偽りの歴史像であったことが判明したからです。それは教科書まで書き換えるなくてはならない事態にまで発展しました。

日本考古学協会は、「前・中期旧石器問題調査研究特別委員会」発足させ、事件の検証調査をおこない、600余ページにおよぶ報告書を作成しました。それによればねつ造は少なくとも25年以上の長期にわたり、関与する遺跡は50ヶ所を数えました。

検証の報告書は、ねつ造した人物を糾弾する目的のものではありません。考古学界が事実をしっかりと見つめ、ねつ造にいたった背景、経緯をしっかりと社会に説明し、二度とこのようなことが繰り返されないために作成されました。



ねつ造事件のマスコミ報道

日本考古学協会がまとめた「前・中期旧石器ねつ造事件の検証報告書

「ねつ造事件」を教訓として

2001年7月に発掘調査された長野県飯田市竹佐中原遺跡は、ねつ造事件発覚後に新たに発見された3万年を遡る可能性が高い遺跡として注目されました。考古学全体に疑惑がもたれるような社会状況の中での調査では、調査内容の早期公開や、遺跡指導委員会を設置して考古学・地質学など幅広く意見を聞くことのできる環境を整備しました。

記録の写真も一例として、①石器が地面から顔をのぞかせた直後段階、②全体の出土状況、③取り上げ後の状況となるべく多くの調査情報が後にも検証できるように配慮しました（下写真参照）。

「ねつ造事件」の発覚によって、考古学が今まで積み上げてきた方法などが根本的に崩壊したわけではありません。ただやもすれば閉鎖的に陥り易い学界体質は改められ、調査や研究は、より公正な議論・検討がなされようようになりました。



①出土直後の写真



②全体出土状況の写真



③石器取り上げ後の写真

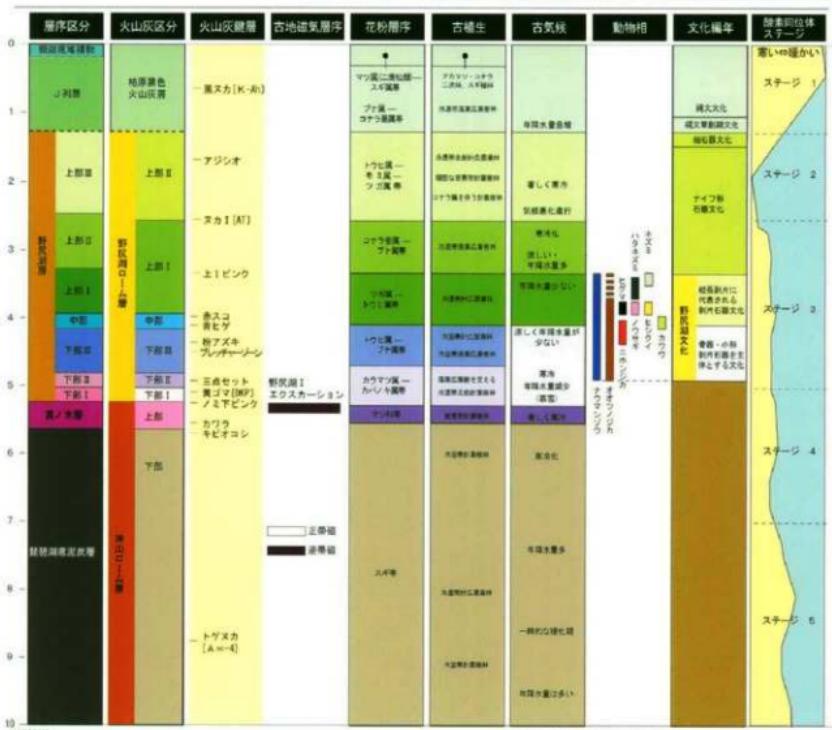
先土器時代の自然環境

先土器時代の気候変動

地球は温暖な時期と寒冷な時期を繰り返してきました。先土器(旧石器)時代は森林が乏しく、草原に樹木が散在する現在の霧ヶ峰のような景観であったと考えられます。その草原で現在は絶滅してしまったナウマンゾウやオオツノシカを見つけ、狩りをしていましたことでしょう。



現在の霧ヶ峰



野尻湖の地層からわかった自然環境の変遷

柱に記載の樹種は、健太郎たちの一時的記述。
柱が變化するは実測年齢(約)にもとづき、健太郎体スケージはもろろんの変遷により一時的記述。
「アヒル」のグラフには、「神奈川県立水の科学・環境博物館」をもとに作成した。

先土器時代の狩りの獲物

先土器時代人が狩りをしていた動物。
ナウマンゾウ、オオツノシカ、ヤギュウは絶滅して
おり、ヒグマも北海道に生息するのみです。
絶滅の要因のひとつにヒトの狩猟が考えられます。



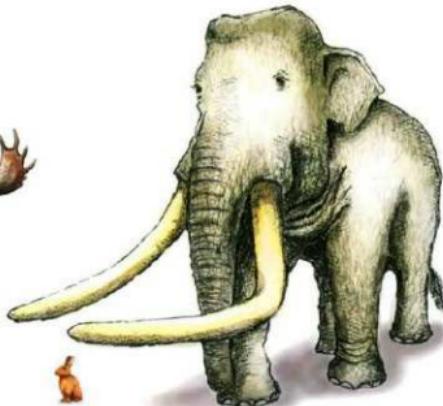
ヤギュウ



ヒグマ



オオツノシカ



ナウマンゾウ



メフサギ



ニホンジカ



ヒト

植物食

先土器時代人は動物の肉以外にも植物を食べていたと考えられます。ただ、気候は冷涼だったので、
その気候にあった、ハシバミやチョウセンゴヨウの松の実といった、ナッツ類を採集していたと考え
られます。



ハシバミ



チョウセンゴヨウ



ツノハシバミの木

2 最古の狩人を追う

いわじゅく 岩宿の発見

1949年、群馬県岩宿遺跡で洪積世の堆積層である関東ローム層から石器が発掘され、日本列島の人類文化のはじまりは、氷河時代まで遡ることが確実になりました。その後も最古の狩人の遺跡への探求は「前期旧石器存否論争」と呼ばれるほど、学界でも議論的でした。「ねつ造事件」の反省を踏まえて、今新たに列島の人類文化のはじまりについて学界でも慎重に研究が進められています。3万年を越ると考えられる石器群がその対象となります、年代観や石器の認定など研究者間でもなかなか一致を見ないのが現在の状況です。



7
縄文文化以前の文化の存在を
証明した石器

群馬県岩宿遺跡
重要文化財
所蔵：明治大学博物館
写真左 左 長さ 9.5cm
写真右 左 長さ 8.2cm
写真提供：明治大学博物館



日本列島最古の人類文化を求めて

日本列島に「前・中期旧石器時代」はあるのか？

世界の各地では100万年をさかのぼる前期旧石器時代やその後の中期旧石器時代の遺跡が発見されています。はたしてその時代に相当する石器を持った狩人たちが日本列島にいたのでしょうか？

その答えを導き出すためのアプローチ方法は大きく2つあると思われます。ひとつは周辺諸国、つまり朝鮮半島や中国、シベリアなどの地にある前・中期旧石器と同じ特徴をもつ石器群を見出すこと、もうひとつにはこの日本列島最古の石器はいったいどのような特徴と性格をもつものなのかを追究していくことです。未知の石器を理解することは、とても困難なことです。これから研究成果が期待されます。

世界の前期・中期旧石器



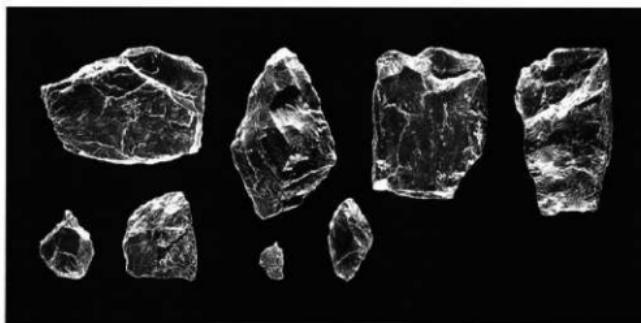
5
インドの前期旧石器

インド マドラス遺跡
所蔵：明治大学博物館
左下 長さ 11.8cm



6
中国の中期旧石器 複製

中華人民共和国 丁村遺跡
所蔵：明治大学博物館
左上 長さ 16.2cm



13

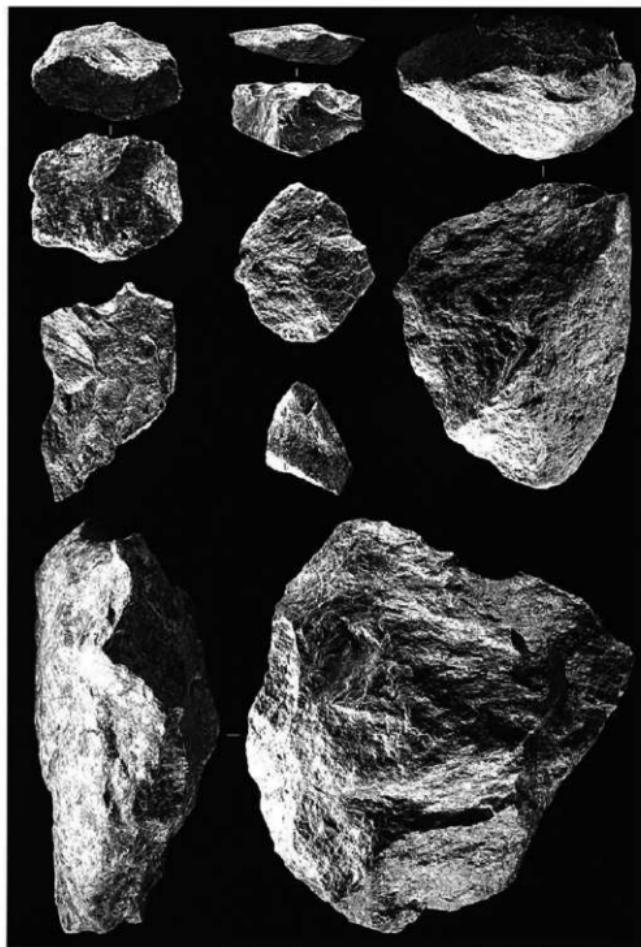
日本前期旧石器時代とされる石器

栃木県星野遺跡

所蔵：東北大学考古学研究室

左上 長さ 46cm

写真提供：東北大学考古学研究室



14

日本前期旧石器時代とされる石器

大分県早水台遺跡

所蔵：東北大学考古学研究室

左上 長さ 49cm

写真提供：東北大学考古学研究室
(右上。下段は岸沢長介氏撮影)



8
長野県最古級の石器

飯田市竹佐中原遺跡 A 地点
所蔵：長野県埋蔵文化財センター
写真上：左奥 長さ 8.1cm
写真右：左端 長さ 10.2cm
写真提供：長野県埋蔵文化財センター



9
長野県最古級の石器

飯田市石子原遺跡
所蔵：長野県教育委員会
左下 長さ 9.2cm





10 長野県最古級の石器 中野市がまん沼遺跡

所蔵：長野県立歴史館 左上 長さ 8.3cm



11 長野県最古級の石器・骨角器 複製

信濃町立が鼻遺跡

所蔵：長野県立歴史館

写真上 左 長さ 6.8cm

写真左 左 長さ 14.2cm



12 東北地方最古級の石器
所蔵：岩手県立博物館
左上 長さ 16.4cm



15 南関東地方最古級の石器
所蔵：東京都教育委員会
左 長さ 9.8cm



16 東海地方最古級の石器 静岡県井出丸山遺跡
所蔵：沼津市文化財センター 左上 長さ 4.5cm



17 東海地方最古級の石器 静岡県沼ヶ沢遺跡
所蔵：静岡県文化財調査研究所 左上 長さ 2.7cm



18-1 東海地方最古級の石器 静岡県富士石遺跡
所蔵：静岡県文化財調査研究所 左上 長さ 4.7cm



18-2 東海地方最古級の石器 静岡県富士石遺跡
所蔵：静岡県文化財調査研究所 左上 長さ 12cm



19
東海地方最古級の石器

静岡県追平 B 遺跡
所蔵：長泉町教育委員会
左上 長さ 3.5cm

3 狩人の集まる湖

野尻湖遺跡群

野尻湖は黒姫山、妙高山、斑尾山、飯繩山に囲まれた風景
が、まだらかな高原地帯にあります。野尻湖の南西に位置する
およそ6km×4kmの丘陵地帯の頂部や尾根、裾部の平坦な
場所のはとんどに先土器（旧石器）時代の遺跡があります。野
尻湖周辺は国内でも有数の先土器時代～繩文時代の初め頃の遺
跡密集地帯なのです。なぜ、たくさんの遺跡が残されたのか、
そこで人びとはどのような生活をしていたのか、約3万年前
の人びとが野尻湖周辺に遺した遺跡や遺物から考えてみましょ
う。



遺跡が密集する野尻湖周辺

遺跡群の解釈

日本列島全域でも3万年よりも古いと考えられている遺跡は非常に少なく、その上すべての研究者が認めている遺跡はないのが現状です。約3万年前になると誰もが認める遺跡が日本全国にたくさん出てきます。つまり、それまではいたとしても細ほそと暮らしていた人びとが、約3万年前ごろに人口を増やして、日本列島全域で活動するようになったと考えられます。人口を増やすには食料生産量を増す必要があります。当時の人びとは狩りをして生活していたので、よりたくさんの獲物を獲得できるようになったということになります。その理由のひとつとして考えられるのが狩りの効率を高める道具の発明です。日本列島で黒曜石が使われ始めるのがちょうどこの頃にあたります。非常に鋭い削れ口を持つ黒曜石製の石器は狩りの効率を高めたことでしょう。しかし、野尻湖周辺には黒曜石はおろか石器の材料となる石はとれないでの、黒曜石の発見が野尻湖周辺でたくさん的人が生活をした直接的な理由とはいえません。

では、なぜ野尻湖周辺でたくさんの人が生活したのでしょうか。野尻湖周辺にはたくさんの動物が生息する絶好の狩り場であったことが考えられます。野尻湖は日本海から内陸へ向かう、もつともなだらかなルート上に位置していることから、古くから交通の要所となっています。約3万年前は日本海から黒曜石産地へ向かう重要なルートであったことでしょう。このなだらかな地形を経るルートは人間だけではなく、動物にとっても重要なルートであったと考えられます。また、野尻湖周辺はたくさんの沼や湿地があり、動物が生息するにもよい環境でした。

人びとはどこからやってきたか

石器の材料がとれない野尻湖周辺には、多くの石器が持ち込まれています。この材料を調べることにより人びとがやって来た方向を推測することができます。



図1 野尻湖遺跡群と石器石材产地 (中村 1995)

この頃の野尻湖遺跡群に存在する斧形石器の石材の蛇紋岩は北西方向 50km ぐらいに位置する新潟県の姫川河口周辺から持ち込まれています。このように野尻湖周辺に持ち込まれている石材はいろいろな方向から来ており、あたかも、石材と共に人びとが集まっているかのように思えます。

なぜ集まつたか

先土器時代の人びとは動物の狩りや、植物を採集することで生活をしていました。同じ場所で生活を続けると、周辺の動物や植物を取り尽くしてしまいます。そうならないように、日常は一か所に留まらず、移動をしながら生活をしていたと考えられています。移動生活といってもでたらめに獲物を追いかけて、不規則な移動をしていたわけではなく、季節的に計画して生活拠点を移動させていたと考えられます。移動先には黒曜石などの石材产地が含まれていたと考えられます。

たくさん的人が一緒に行動するとたくさんの獲物が必要となります。そのため日常は家族などを単位とする小集団で移動生活をしていたと考えられます。しかし、常に小集団だったわけではありません。必ず集まらなくてはならなかった理由もあったのです。なぜでしょうか。

それは、子孫を残すためです。家族を基本とする小集団だけでは婚姻が成り立たず、子孫を残していくことができません。子孫を残していくには必ず血縁関係が薄い他の小集団の人と出会い、婚姻関係を結ぶ必要があるのです。野尻湖周辺は絶好の狩り場であったため、複数集団が集まつてもその分たくさんのが食料を得ることができました。妙高山や黒姫山、飯糰山などは、かなり離れた場所からもその存在を見ることができます。計画的に移動生活をしていた人びとは、ある季節になるとこの山を目指して移動して来たのではないでしょうか。そして、山の麓には大きくて美しい象徴的な湖、野尻湖があります。ここは絶好の狩り場だけではなく、人びとの出会いの場であったと考えられるのです。



日向林B 遺跡の環状ブロック群出土状況

人びとが集まつた環状のムラ

野尻湖の南岸から約 1 km の場所に日向林 B 遺跡があります。この遺跡は先土器時代の「環状ブロ

この頃、最も多く持ち込まれている石材が黒曜石になります。野尻湖は長野県の北端近くにあります。黒曜石产地までの距離は直線でも 80km 近くあることから、歩けるルートを通った場合は 100km 程度の道のりを経て持ち込まれることになります。他に貞岩や玉髓という優れた石器の石材があります。貞岩、玉髓の产地は新潟県津南町以北と考えられており、黒曜石とはまったく異なる北東方向に 50km 以上離れた場所から持ち込まれています。また、

ック群」と呼ばれる人びとが環になって活動をした痕跡が残されています。この遺跡をモデルに集まつた人びとの生活を考えてみましょう。

図2は日向林B遺跡から出土した石器が出土した場所を点で示したもので、全部で9,001点の石器が出土していますが、石器は数百点ぐらいの単位で、直径6m前後ぐらいの範囲に集中して出土します。この石器集中のことを「ブロック」(図中ではBLと表記)と呼びます。日向林B遺跡のブロックはその配置や性格から3つに分けられます。

BL1～15はブロックが環状に配置している「環状配列ブロック群」、BL16～20は環状配列ブロック群の内側中央に位置していることから「中央ブロック群」としましょう。

日向林B遺跡には、黒曜石と玉髓という石材が持ち込まれています。黒曜石は南に100km程度、玉髓は北西に50km以上と2種の石材はまったく違う方向の遠い場所のため、それぞれ別の集団が遺跡に持ち込んだと考えられます。そのため、持ち込まれて間もない時には、黒曜石と玉髓は別べつにまとまって分布していたと思われます。遺跡の中で石器を作ったり、使ったりする過程で人がブロック内外にこれらを持ち運ぶため、徐々に分布が広がり、互いが重なっていくこと考えられます。つまり、よく混ざりあっているということは、持ち込まれてからの時間が長く、ブロック間での人の行き来が多かったことを示しているのではないでしょうか。特に密度の高い中央ブロック群と、環状配列ブロック群の間で人の行き来は頻繁であったことでしょう。

人びとはどうしてブロック間を行き来していたのでしょうか。ブロックは石器を作った場所と考えられています。日向林B遺跡の場合、非常に完成度の高い石器や使われた石器がブロック内にたくさん分布することから、使用した場所とも考えられます。

環状配列ブロック群と中央ブロック群はどういう関係にあったのでしょうか。なぜブロックが環状に配列するか考えてみましょう。日向林B遺跡に集まつて来た小集団は、中央の空間を開んで環状に向き合つたのではないでしょうか。環状配列するブロック群は小集団それぞれの石器製作、使用の場所であり、その上あるいは、すぐ近くにはテントのような簡易な家があったことでしょう。

中央ブロック群はどんな場所だったのでしょうか。環状配列ブロック群が小集団それぞれの作業空間だったのに対して、中央ブロック群は共同の作業空間であったと考えられます。日向林B遺跡ではこの空間に非常に密度の高い大きなブロックが存在しています。

図3は出土した石器類の接合作業をして、接合した石器を線で結んだものです。中央ブロック群と環状配列ブロック群の間がたくさんの線で結ばれていることがわかります。これは、両ブロック群の間で多くの人の行き来があったことを示します。小集団固有の空間である環状配列ブロック群と、共有空間の中央ブロック群の間で何回も行き来があったと考えられるのです。

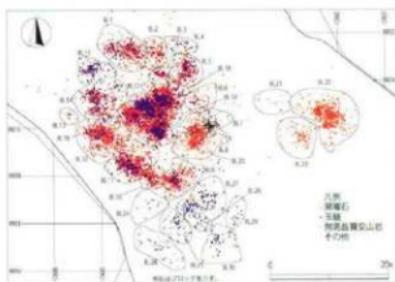


図2 日向林B遺跡の石材別石器分布図

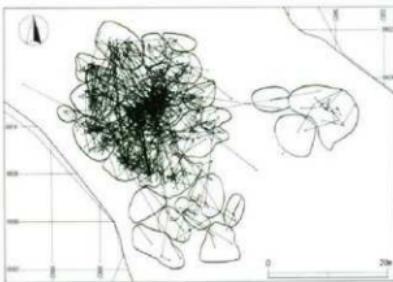


図3 日向林B遺跡の石器接合分布図

日向林B遺跡で何が行われたか

日向林B遺跡で行われた作業とはなんだったのでしょうか。日向林B遺跡は小集団が集合した大集団が生活した遺跡と考えてきました。石材の分布からその滞在時間は長かったと推測しています。大集団が長時間同じ場所に滞在するには、大量の食料が必要となります。いったいどのようにしてこの食料を獲得したのでしょうか。

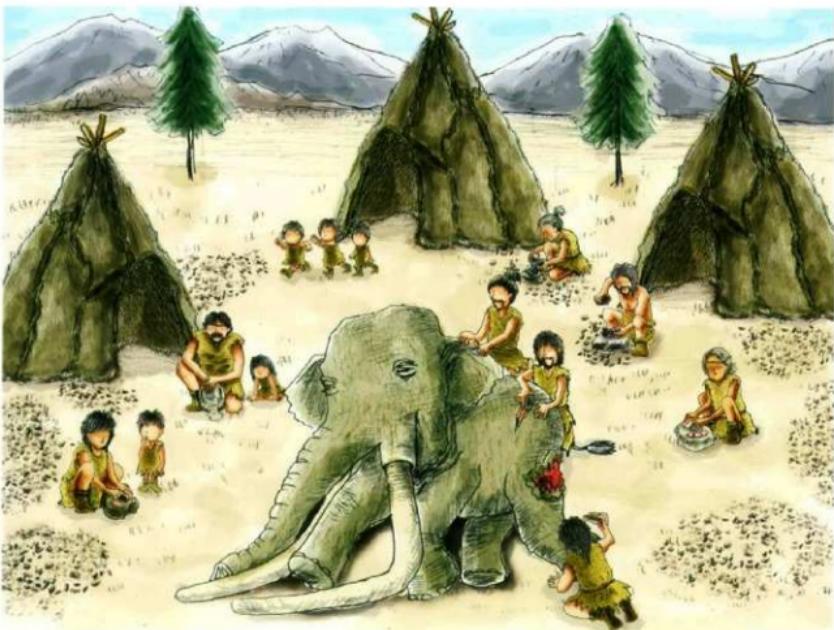


図4 環状のムラの復原図

野尻湖はナウマンゾウ化石が出土することで知られています。残念ながら野尻湖で見つかっているナウマンゾウの化石の年代は4万年前前後で時期が異なりますが、3万年前にもナウマンゾウが生息していた可能性は十分にあります。ナウマンゾウの成獣は4~5tもの体重があります。このうち食べられる部分は半分ぐらいでしょうか。仮に2tの肉が食べられるとしましょう。1日に1人の人間が1kgの肉を食べると想定した場合、2tは2,000日分、50人の集団でも40日分の食料となります。

日向林B遺跡はナウマンゾウを仕留めた後から、食べつくすまで生活を行った遺跡ではないかと考えられています。

ゾウは季節的に群れをなして移動する動物です。野尻湖周辺を通る季節があったことでしょう。その季節に合わせて、小集団は野尻湖周辺へと移動をしてきます。そして、ある集団あるいは共同で狩りをした結果、ナウマンゾウの狩猟に成功します。5tもあるゾウを運ぶのは大変なので、人びとはゾウを取り囲むように集まって来たのではないでしょうか。つまり、中央ブロック群付近に仕留めたナウマンゾウがいて、環状ブロック群には集まつた小集団のテントがある。中央ブロック群では共同してナウマンゾウの解体がおこなわれ、食料が分配されていたのでしょう。分配された食料は、環状配列ブロック群にあるそれぞれの小集団のテントに持ち帰られました。この活動が1~2か月繰り返

されて、環状ブロック群が残されたと考えられます。

ここではただ肉を食べるだけの生活をしていたわけではないでしょう。出会った小集團間では婚姻が結ばれたでしょうし、石器や道具の交換、いろいろな情報交換がおこなわれていたに違いありません。

ナウマンゾウの獲得により、安定した食料が長期間得られる場です。また、婚姻が結ばれるまでたまに場です。そこには祝いや祭りの儀式もあったことでしょう。

ナウマンゾウの解体が終わると人びとは遺跡を去っていきます。その時、自分たちの生活した環状配列ブロック群の片隅に、象徴的で大型の石器、石斧（斧形石器）をまとめて置き去ります。あたかも、次の出会いと狩りの成功を願う儀式のように。

(長野県教育委員会文化財・生涯学習課 谷 和隆)



斧形石器の集中出土



20-1
斧形石器

信濃町日向林B遺跡
所蔵：長野県立歴史館
左 長さ 15.8cm



20-2
斧形石器と磁石

信濃町日向林B遺跡
所蔵：長野県立歴史館
左 長さ 18.8cm



20-3 台形石器や小形の剥片石器
信濃町日向林B遺跡
所蔵：長野県立歴史館 左上 長さ 4.5cm



21
斧形石器・ナイフ形石器

信濃町貴ノ木遺跡第3地点
所蔵：長野県立歴史館
写真右：右 長さ 10.1cm
写真下：左上 長さ 43cm



22
斧形石器・ナイフ形石器

信濃町大久保南遺跡
所蔵：長野県立歴史館
左上：長さ 75cm



石器文化の交差点



日本列島の各地を狩人たちは生活の舞台としていました。定住することなく移動生活を送っていたと考えられますが、日常の生活領域は10kmから10数kmといわれています。2万年前頃になると、日本列島の中で地方色が見受けられるようになります。

当時の彼らの道具にナイフ形石器と呼ばれる石器があります。この石器は短い柄をつければ、ナイフや包丁になりました。長い柄をつければ槍にもなりました。このナイフ形石器に地域により形や作り方に違いが見出せます。

東北・北陸方面では柳の葉のような形をしたナイフ形石器が、関東地方では三角形・菱形のナイフ形石器が、近畿地方では横長の石片を用い半月形をしたナイフ形石器が、九州地方では石器の付け根をえぐりこむナイフ形石器が作されました。

野尻湖周辺の遺跡では、それら各地の特徴をもったナイフ形石器が出土し、さながら石器の博物館のようです。2万年前の野尻湖周辺は各地の石器文化が交わる交差点であったようです。

日常的にそれら遠い地域と行き来していたとは考えづらいので、時により遠くまで移動したと考えた方がよさそうです。はるか昔から人びとはかなり遠い地域の情報を交換することができたことがうかがえます。

2万年前は氷河期の中でも最も寒冷な時期にあたります。遠い地域との交流も厳しい自然の中を生き抜く工夫だったのかもしれません。

23-1
ナイフ形石器・彫器

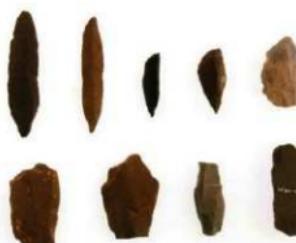
信濃町杉久保遺跡
所蔵：野尻湖ナウマンゾウ博物館
左 長さ 8.2cm

23-2
石刃・斧形石器

信濃町杉久保遺跡
所蔵：野尻湖ナウマンゾウ博物館
右から 2番目 長さ 15.3cm

24
ナイフ形石器・彫器

信濃町七ツ葉遺跡
所蔵：長野県立歴史館
左上 長さ 7.6cm

25 ナイフ形石器 新潟県上ノ平遺跡 C 地点
新潟県指定文化財 所蔵：新潟県埋蔵文化財事業団
左 長さ 15.5cm 写真提供：新潟県埋蔵文化財事業団



26
ナイフ形石器

信濃町裏ノ山遺跡
所蔵：長野県立歴史館
左 長さ 8.4cm



27
ナイフ形石器

神奈川県寺尾遺跡第VI文化層
神奈川県指定文化財
所蔵：神奈川県教育委員会
左上 長さ 5.3cm



28
ナイフ形石器

埼玉県砂川遺跡
重要文化財
所蔵：明治大学博物館
左 長さ 8.3cm
写真提供：明治大学博物館

30
ナイフ形石器

信濃町東裏遺跡
所蔵：長野県立歴史館
左 長さ 7.3cm



29-1
ナイフ形石器

信濃町西岡 A 遺跡
所蔵：長野県立歴史館
左 長さ 10.7cm



31
ナイフ形石器

大阪府南花田遺跡
所蔵：大阪府埋蔵文化財センター
左上 長さ 8.0cm



32
ナイフ形石器

大阪府長原遺跡
所蔵：大阪市文化財協会
左 長さ 5.3cm





33 ナイフ形石器 信濃町東裏遺跡
所蔵：長野県立歴史館 左上 長さ7.3cm

石器の基部（＝下半部）をえぐり込むようにつくったナイフ形石器は九州地方、更には朝鮮半島で特徴的に出土します。それらは剥片尖頭器と呼ばれていますが、東裏遺跡でもその剥片尖頭器に酷似したナイフ形石器が出土しました（写真左上）。東裏遺跡のナイフ形石器は他にもえぐりを強くもつ石器が多く、全体的に九州地方の石器群と近い関係であることを感じさせる石器群です。

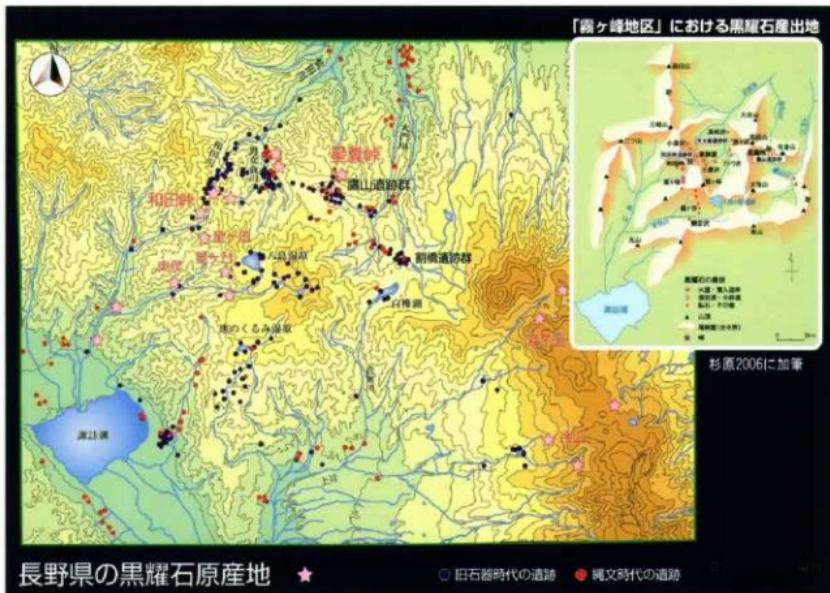
4 黒曜石を求めて

火山が噴火して、マグマが急に冷えて固まった時に黒曜石ができます。日本は火山国なのでどこでも黒曜石があるのかというと、そうではありません。マグマの成分によって黒曜石ができる場合とできない場合があります。日本には 50 か所以上の黒曜石の産地があります。そのなかでも長野県の霧ヶ峰から八ヶ岳の一帯には和田岬や星ヶ峰、星ヶ塔、麦草岬といった有名な黒曜石の産地が密集しています。ガラス質の黒曜石は切れ味がとても鋭いので、石器時代の人々にとって生活に欠かせない大事な道具の多くが黒曜石で作られていました。



黒曜石を採取する

信州黒曜石原産地と遺跡



■提供：長和町黒耀石体験ミュージアム

黒曜石の産出状況



長和町東餅屋の黒曜石岩脈のあと
和田岬周辺には工業として極削された黒曜石の岩脈跡が見ることができます(開口部がもとの岩脈)。



長和町牧ヶ沢の黒曜石岩脈
男女食道跡の林道切通しに岩脈の一部が露出しています。



茅野市冷山の黒曜石露頭
山の斜面に流れ出した黒曜石の溶岩が、高さ5mを越す岩塊となってみられ
ます。

石器は持ち出されたか

小県郡長和町、星糞峠黒曜石原産地の直下にある鷺山第Ⅰ遺跡M地点では、第1ブロックから黒曜石製の遺物が6,000点余りが出土しましたが、利器としての道具は非常に少なく0.1%にすぎませんでした。多くの遺物は縦長剥片とそれらを剥ぎ取ったと考えられる石核でした。その遺物の構成から、この地点では、周辺で採取した原石をこの場所で打ち割り、必要な道具の素材（おそらく石刃）を遺跡から持ち出したと推定されます。つまり遺跡には、原石から初期の段階に打ち割られた原石面を残し、あまり形の整っていない縦長剥片と、整った縦長剥片を取り終えた後の石核が残されていたことになります。



34-1
縦長剥片

長和町鷺山第Ⅰ遺跡 M 地点
所蔵：長和町教育委員会
左 長さ 7.4cm



34-2 石核 長和町鷺山第Ⅰ遺跡 M 地点
所蔵：長和町教育委員会 右奥 長さ 22.5cm



35

ナイフ形石器・槍先形尖頭器

長和町男女倉遺跡第I地点ほか

所蔵：信州大学

写真左：ナイフ形石器 左 長さ 4.9cm

写真下：槍先形尖頭器 左上 長さ 12cm



36

ナイフ形石器・槍先形尖頭器

長和町男女倉遺跡 B 地点

所蔵：長和町教育委員会

写真左上：槍先形尖頭器 右 長さ 2.3cm

写真右上：ナイフ形石器 左上 長さ 4.2cm

写真左：槍先形尖頭器 左 長さ 6.4cm

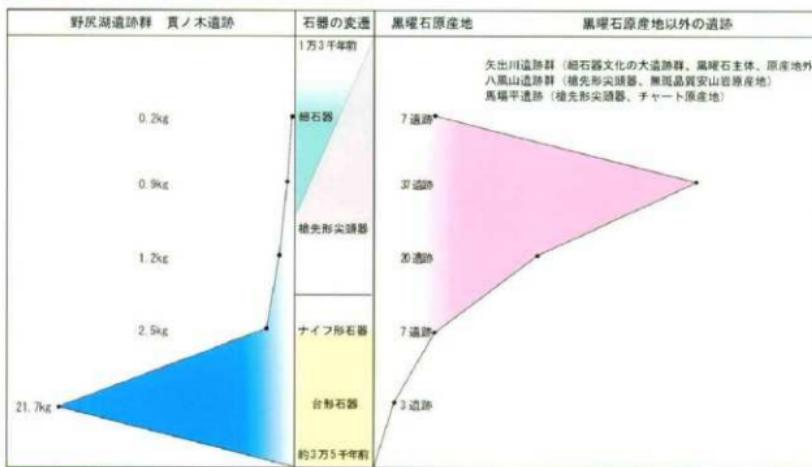
消費地の槍先形尖頭器



原産地と消費地の遺跡

下図は黒曜石原産地の遺跡数の変化と野尻湖の消費地と考えられる遺跡の消費量をあらわしたグラフです。

黒曜石原産地帯の遺跡を時代別に概観すると、3万年前の遺跡は少なく、2万年を過ぎた槍先形尖頭器の時期に爆発的に増加します。一方、消費地の野尻湖周辺の賀ノ木遺跡における黒曜石の出土状況をみると、3万年前は原産地から直接原石を野尻湖の遺跡まで持ち込みますが、2万年以降は原産地で石器製作をおこない、製品を遺跡に持ち込んでいるようです。原産地と消費地は長い年月のなかでその意味が変わってきています。



先土器時代における黒曜石の利用変遷

北海道黒曜石原产地



北海道白滝地区赤石山8号沢の黒曜石大露頭



赤石山から下流100kmの湧別川川原の黒曜石転石

赤石山珠雞の沢の黒曜石原石



北海道白滝地域の黒曜石原産地と周辺の遺跡 直江康原氏提供



38 大型石刀・削器 北海道白滝遺跡群
所蔵：北海道立文化財センター 左 長さ 28.4cm



39-1 大型尖頭器 北海道白滙遺跡群
所蔵：北海道埋蔵文化財センター 右 長さ 36.2cm



39-2 大型尖頭器 北海道白滙遺跡群
所蔵：北海道埋蔵文化財センター 右 長さ 18.1cm

5 縄文文化の芽生え

本州細石器文化の石器群



40-1 細石刃核 南牧村矢出川遺跡群
個人蔵 左上 長さ 3.5cm



40-2 細石刃 南牧村矢出川遺跡群
個人蔵 左上 長さ 2.2cm



41 細石刃装着復元資料
個人蔵 長さ 16.5cm

北海道縄石器文化の石器群



42-1

細石刃

北海道白滻遺跡群

所蔵：北海道埋蔵文化財センター

左上 長さ 48cm



42-2

細石刃核

北海道白滻遺跡群

所蔵：北海道埋蔵文化財センター

左上 42 × 38cm



42-3

細石刃核の接合資料

北海道白滻遺跡群

所蔵：北海道埋蔵文化財センター

左上 10.4 × 5cm



42-4

細石刃と細石刃核の接合資料

北海道白滻遺跡群

所蔵：北海道埋蔵文化財センター

左 長さ 36cm

優美な石槍と巨大な石斧をもつ石器群



43 石槍・石斧ほか 複製 南箕輪村神子柴遺跡
重要文化財 所蔵：長野県立歴史館 右 長さ23cm



44 石槍・石斧ほか 上田市唐沢B遺跡
長野県宝 所蔵：上田市教育委員会 右 長さ23.2cm 写真提供：千曲川水系古代文化研究所



45
槍先形尖頭器

佐久市下茂内遺跡
長野県
所蔵：長野県立歴史館
左上 長さ 11cm

土器の出現



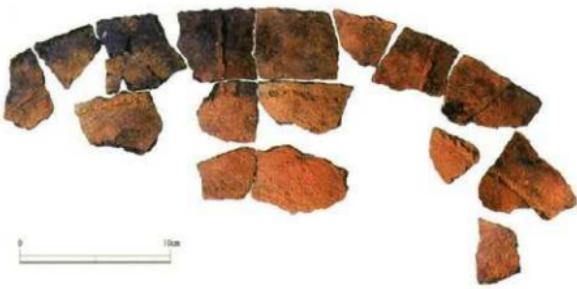
46
石斧・削器・石刀ほか

青森県大平山元I遺跡
外ヶ浜町指定文化財
所蔵：外ヶ浜町教育委員会
左上 長さ 9.5cm
写真提供：外ヶ浜町教育委員会



47
無文土器

青森県大平山元I遺跡
外ヶ浜町指定文化財
所蔵：外ヶ浜町教育委員会
左上 23 × 25cm
写真提供：外ヶ浜町教育委員会



48
隆起線文土器

信濃町貴ノ木遺跡
所蔵：信濃町教育委員会



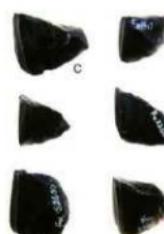
49
隆起線文土器ほか

長崎県福井洞穴遺跡
所蔵：東北大学考古学研究室
a 6.0 × 5.3cm
b 径 6.4cm (土製品)
c 径 10.4cm (石製品)



50
細石刃・細石刃核

長崎県福井洞穴遺跡
所蔵：東北大学考古学研究室
a 長さ 2.5cm
b 横幅 5.6cm
c 3.5 × 3.0cm





51
隆起線文土器

東京都前田耕地遺跡

重要文化財

所蔵：東京都教育委員会

大きさ 10 × 10.5cm

写真提供：東京都教育委員会



52 石槍 東京都前田耕地遺跡
重要文化財 所蔵：東京都教育委員会

左上 長さ 19.5cm 写真提供：東京都教育委員会



54-1 石槍ほか 岡谷市中島B遺跡
所蔵：長野県立歴史館 左 長さ 6.8cm



54-2 石槍 岡谷市中島B遺跡
所蔵：長野県立歴史館 左から2番目 長さ 5.4cm

53 隆起線文土器 岡谷市中島B遺跡
所蔵：長野県立歴史館 上 32×20cm



55・56 隆起線文土器に伴う石槍・石斧 信濃町星光山荘B遺跡
所蔵：長野県立歴史館 右下 長さ 17.2cm

氷河時代狩人の生活と集団

稲田孝司（岡山大学名誉教授）

1. みはてぬ夢か、みはてる夢か

日本列島の第四紀更新世については、石器を含む旧石器時代遺跡が数千カ所ある。哺乳動物化石の産地は数百カ所だ。しかし、石器と動物骨と一緒に含む旧石器時代遺跡はほとんどない。この点で、日本の旧石器時代遺跡はアフリカ、ヨーロッパ、シベリア、中国などの旧石器時代遺跡と大きく異なる。日本旧石器時代研究の弱点だ。石器が火山灰層などの酸性土壤に含まれるために動物骨がのこりにくい、というのが一応の解釈である。

他方、動物化石は主に水成堆積層中と石灰岩の洞窟や割れ目にのこる。しかし水成堆積のような場所は人間の居住にあまり適していない。石灰岩についても、日本ではその分布域が狭いえに、列島旧石器人はなぜか洞窟を住まいとすることを好まなかった。

ともあれ人間の骨や動物の骨と石器が一緒に出土しないことには、旧石器人の生活全体を復元するのがむずかしい。そこで人類遺品と動物化石の共伴する遺跡を探そうというのが、考古学者のみならず人類学者や古生物学者までをとらえる一つの夢となってきた。日本ではなかなか実現したい夢、いまだ確実な成果に到達していない目標だ。果実の見えない仕事に手はだしにくいものだが、それでも少しづつ研究は進んでいる。

長野県野尻湖立が鼻では、1962年以来の発掘調査でナウマンゾウやオオツノジカの化石が多量に出土しており、人間との共伴を追究しうる有力な地点の一つだ。化石は約5万年前から3.3万年前とされ、水成堆積の火山灰層（野尻湖層）に含まれていた。石製の剥片や鉈状骨器等が報告されている（野尻湖人類考古グループ 2003 他）けれども、散在状態のものが多く、陸上の旧石器時代遺跡のようまとまとった石器製作跡はみられない。周辺地域では上信越自動車道・野尻バイパス等の建設に伴って多くの発掘調査がおこなわれたが、石器を産出した野尻湖層と同時代の陸成層からは石器がまったく出土しなかった。

岩手県花泉は、1953年以降、松本彦七郎らによって発掘調査され、ナウマンゾウ、ヤギュウ（ハナイズミモリウシ）、オーロクス（原牛）、オオツノジカ、ヘラジカ、ノウサギ等の化石骨片が2000点以上出土した（松本・森 1956 他）。AT火山灰降下期（2.8万年前）より新しく、2万年余り前と推定されている。ウシ科動物が主体をなす化石動物群は、日本列島全体の中でもこの花泉だけだ。加えてヘラジカのような北方系の動物を含んでおり、津軽海峡に一時に形成された氷橋を渡って北海道から南下してきた動物群と推定されている。松本彦七郎は出土した骨に人為的な加工痕があることを指摘し、直良信夫や加藤晋平らはシカの角やウシの肋骨を砥石でとがらせた尖頭器があると報告した（直良 1959・1968、加藤・鶴丸 1976）。石器は皆無だった。AT火山灰以後の時期なら、もう立派な石刃石器が普及している。多量の動物を狩りし解体したはずの人間が、石器一つ残さなかつたというはどうも不可解だ。

人間と動物との結びつきを知るには今のところ野尻湖と花泉が最有力資料なのだが、話はいま一つすっきりしない。

2. 人間が居ても居なくても自然を知ることが大切

わたくしもいくつかの地点で化石を調査してきた。これらの調査は、結果的にはむしろ人間と無関係な化石の産状を明らかにするものとなつたけれども、化石産地で人間の痕跡をつきとめようとする目標を実現していくうえでいろいろ教訓を得ることが多かった。

例えば1982・1983年に調査した大分県代ノ原では、阿蘇4（Aso-4）火碎流による堰き止めで形成

されたらしい湿地の一角にナウマンゾウ 1 個体が横たわっていた。多くの骨は破碎状態にあったが、基本的な骨格配列は保たれている。小さな骨片すべての分布位置を記録により、骨片どうしの接合を丹念に進めた結果、骨が骨端または突出部からしだいに破片となってゆく様子が推察できた（稲田 1989）。

動物種の分類や記載が主な関心事であった古生物学の化石発掘では、普通、小さな骨片の位置を記録するような手間はかけない。考古学研究者が考古学的な手法で発掘することにより、見えてくるものがずいぶんあると実感した。今日の古生物学ではタフォノミー研究（化石の成因を調べる研究）が盛んであり、結果的に化石の産状から自然か人為かを問おうとするわたしたちの問題関心とも重なっててくる。

代ノ原では、ある古植生研究者が花粉分析を行うためにゾウ包含層の土壤を分析した。トウヒ属の花粉が多産し、九州でこれほど寒冷な植生はウルム氷期最寒冷期のそれにふさわしいとして、私たちの発掘以前に出されていた放射性炭素年代 16,890 年を採用された。発掘調査により、当時 3 万年前と見なされていた九重第 1 輪石 (KjP1) よりもゾウ包含層が 2m ほど下位にあり、ゾウ化石と一緒に出土した木片で放射性炭素年代が $37,250 \pm 1880$ BP と出された事実を知ったうえでの判断だ。その後、放射性年代については別の木片で $44,200 \pm 500$ BP (AMS) が出されている。トウヒ属花粉の最高値が 95% に達するといつても、ゾウ化石包含層からはトウヒ属ヒメバラモミの球果や枝葉が多量に出土している。ゾウの倒れた湿地岸辺にヒメバラモミの木が数本もあれば、花粉がすぐ下の湿地に多量に落ちようというものだ。代ノ原の種子分析をされた別の研究者は、「この付近は温帯性の気候下にあった」とはっきり述べている。

化石について人為か自然かを問う前に、産出地とその周辺の自然環境全体を正確に把握しておく必要があること、そして基礎となる自然化学分析データの有効性と限界をわきまえ、データを総合的に解釈しなければならないことを学んだ。化石の自然状態が分からなければ人為痕跡も抽出できないのだから、人為痕跡が証明できないからといって落胆する必要は少しもない。

長崎県壱岐における幡ヶ原川層の動物化石を調査したのは、1995・1996 年であった（稲田・河村・樽野 2005）。河川改修にともなう発掘調査で長崎県原の辻遺跡調査事務所の方々が化石を発見し、その産状を古生物学の河村善也氏とわたくしが調査した。化石にはナウマンゾウとオオツノジカが含まれ、玄武岩塊を多く含む泥層ないし砂層に埋もれていた。湖沼の堆積物らしい。同じ層の木片で、 $39,920 \pm 440$ BP の年代がでている。ゾウ臼歯 6 個以外の骨は小さな破片となって少なくとも 80m の範囲に分散していた。構成動物種、年代、産状において、野尻湖立が鼻に類似する面がある。石器など人工品はともなわなかった。

3. 日本列島旧石器人はやはり狩りをしていた

宮城県富沢遺跡の第 27 層は 2 万数千年前の湿地・草原性堆積物で、シカの糞が含まれていた（太田編 1992）。この地層には直径 80cm ほどの炭化物集中が見られ、そのまわりには 111 点の石器や剥片が散らばっていた。つまり、焚き火のそばで石器作りをしていた人間がいたことは確かで、シカが生息していた証拠もある。くわえて有機物の保存状態がきわめて良好なのだ。が、かんじんの骨がない。動物を狩りて食べた証拠はまったく見つかなかった。こんな遺跡があるのだと知ると、旧石器人がどれほど動物を狩りしたのか、疑いたくなってくる。

しかし、日本列島旧石器人がさかんに狩猟していたらしい証拠は別の方面から明らかになってきた。落し穴の発見だ。直径と深さ 1.5m ほどのかなり大きな穴が、5 ~ 10m 間隔で列をなして並ぶ。この初音ヶ原遺跡（三島市教育委員会 1999）の調査にあたった静岡県三島市教育委員会の鈴木敏中氏が 1992 年に、これは落し穴ではないか、と言ははじめた。類例は静岡県下でどんどん増え、最近の静岡県埋蔵文化財研究所による愛鷹山麓の第 2 東名自動車道関連調査で、丘陵の尾根を横断するよ

うに配置した落し穴の姿がいっそう明らかになった。愛鷹・箱根山麓で発見された落し穴の大部分は、3万年前頃までさかのぼる。

近年、九州でも旧石器時代落し穴の調査例がずいぶん増えてきた。九州の細石刀文化期の落し穴は、縄文時代に全国いたるところで盛んに作られた落し穴の起源になるらしい。九州の落し穴でとくに注目されるのは、鹿児島県種子島の大津保畠遺跡の例だ（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007）。約3万年余り前の種子島火山灰層にはっきり覆われているので、古さに問題はない。静岡県の事例より古いかもしれない。穴がややこぶりなこと、穴の下方がラスコ状にふくらむこと、丘陵尾根横断型の列配置でないことなどの相違点はあるが、穴の口をラッパ状に開いて獲物を落としやすく、逃げにくくする工夫は、静岡県の事例とよく共通する。愛鷹・箱根山麓の尾根横断型落し穴は丘陵を上下移動するシカの群れを主に狙ったものと理解されるが、谷頭丘陵上に設置された大津保畠遺跡の落し穴は、どちらかというと縄文時代の落し穴に近く、イノシシを狩猟対象とした可能性が考えられる。大津保畠遺跡の落し穴は、同様に種子島火山灰層の直下で炉跡や局部磨製石斧を出した立切遺跡と隣接しており、一連の遺跡であったらしい。

4. 石器を用いた狩猟の証明

旧石器時代の狩猟研究は落し穴構造の出現で意外な方向へ展開しているが、やはり問題の中心は石器と狩猟との関係だ。尖頭器のように明確に石槍とみなされる道具があり、ナイフ形石器も使用痕からみればやはり槍の穂先に取り付けられた可能性がたかい。ナイフ形石器や尖頭器と動物化石がどのように結びついていたのか、見えてる夢としてなお追究しなければ大切な課題だ。

参考文献

- 稲田孝司 1989『哺乳動物化石の産状と旧石器文化』岡山大学文学部研究叢書2
稲田孝司・河村善也・椿野博幸 2005「原の辻遺跡下層（幡ヶ谷層）の後期更新世哺乳類化石」「志岐原の辻遺跡
総集編」I、長崎県教育委員会、pp213-225
太田昭夫編 1992『富沢遺跡—第30次調査報告書第Ⅱ分冊—旧石器時代編』仙台市教育委員会
鹿児島県立埋蔵文化財センター編・発行 2007『大津保畠遺跡落とし穴シンポジウム—今、よみがえる3万年前の
種子島—』
加藤晋平・鶴丸俊明編 1976『花泉金森遺跡』岩手県花泉町教育委員会
直良信夫 1959『岩手県花泉町金森の化石類と人類遺物と思考される骨角器について』『第四紀研究』1-4,
pp.118-124
直良信夫 1968『狩猟』法政大学出版局
野尻湖人類考古グループ 2003『第14次野尻湖調査報告書』『野尻湖の発掘』9、ナウマンゾウ博物館、
pp.37-50
松本彦七郎・森一 1956『陸中西磐井郡花泉町金森発見の鮮新世末葉化石化床の哺乳類』『動物学雑誌』65-6,
pp.239-249
三島市教育委員会編・発行 1999『初音ヶ原遺跡』

図の出典

- 1: 河村善也、2: 直良 1959・1968、加藤・鶴丸 1976、3: 野尻湖人類考古グループ 2003、4~7: 稲田 1989、8: 長崎県
教育委員会編・発行 2005『志岐原の辻遺跡 総集編』I、9: 太田編 1992、10: 三島市教育委員会 1999、11: 稲田孝司、
12: 鹿児島県立埋蔵文化財センター編 2007

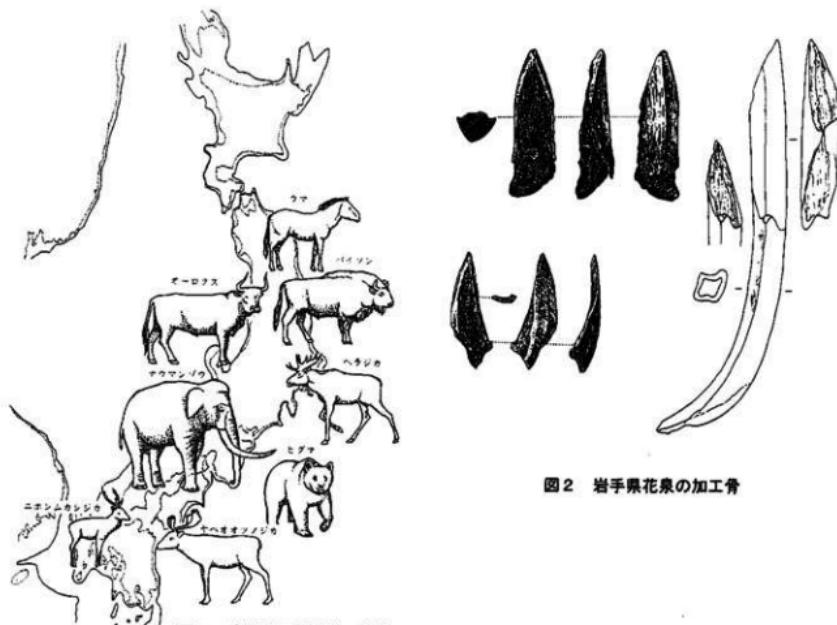


図1 後期旧石器時代の動物

図2 岩手県花泉の加工骨

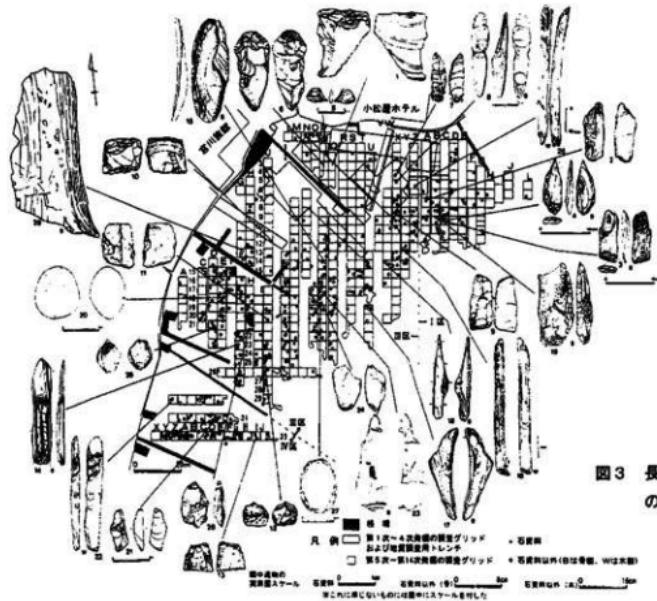
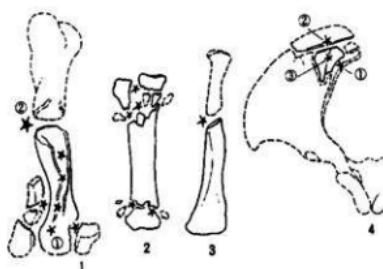
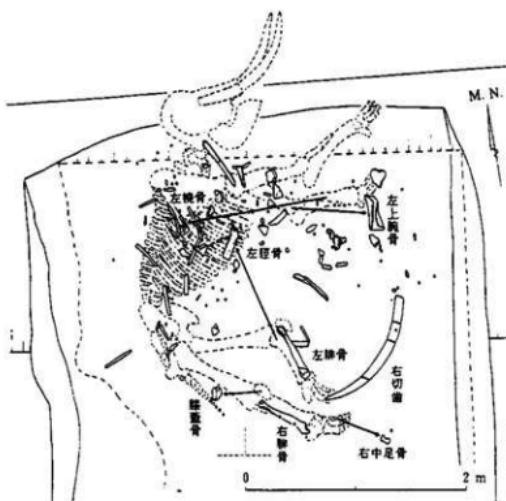
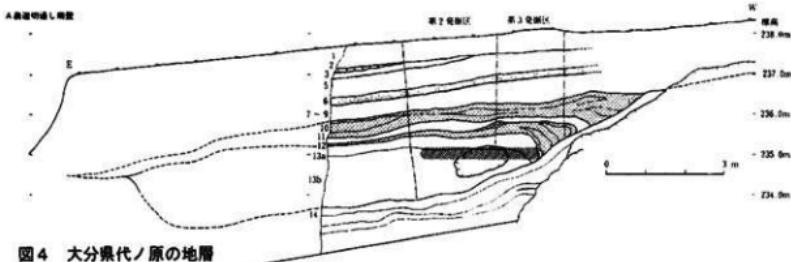


図3 長野県野尻湖立が鼻
の主な出土遺物



27 層堆積直後

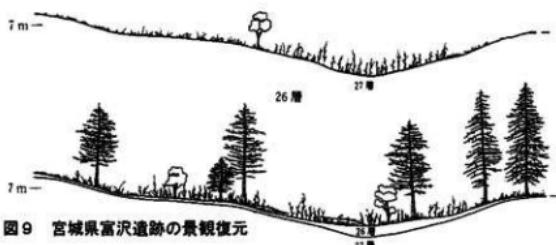


図9 宮城県富沢遺跡の景観復元

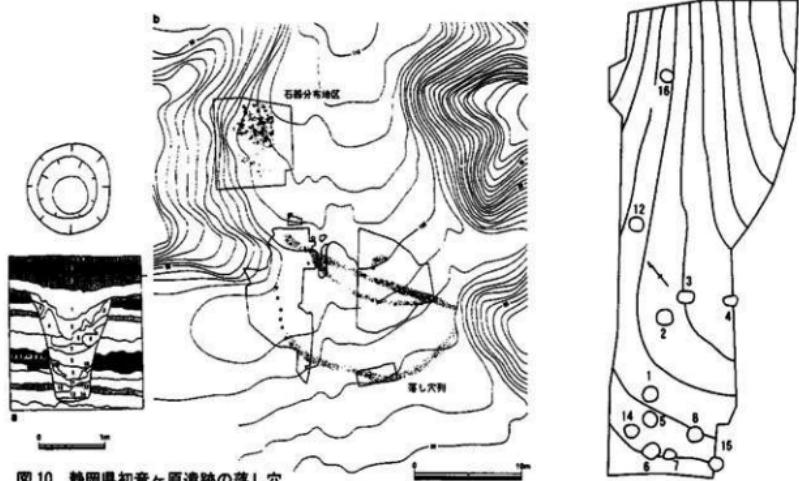


図10 静岡県初音ヶ原遺跡の落し穴

図12 鹿児島県大津保畠遺跡
の落し穴



図11 初音ヶ原遺跡付近の落とし穴列

日本旧石器時代研究と信州の遺跡

小野 昭（首都大学東京教授）

ねらい：旧石器時代の研究の中で信州の遺跡がどんな役割を果たしてきたのか、またその特色はなにかを次の順序で検討する。1) 研究の歩みの画期と信州の遺跡の関係をみる。2) 石器だけではなくか分からぬ、狩猟対象の動物と人類集団の関係を推定できる例が信州にはあるので、有機質の資料（哺乳動物化石）からそれに迫る。この2点から地域としての信州の特色をあきらかにし、今回の全体テーマである「よみがえる氷河時代の狩人」に接近してみたい。

旧石器時代の前提と時間の枠：旧石器時代とは、人類が残した最古の文化期を区別する時代名称である。それには2つの前提がある。第1は、道具（石器）が発見されればどんなに古く遡っても旧石器時代として認定する。第2は、石器は人類によって製作され、人類以外は石器を製作しなかった。この2点が崩れると、旧石器時代の定義は根本から立て直さなければならなくなる。旧石器時代の継続年代は、現状では約260万年前～約1万数千年前までである。終末の年代については世界の各地で多少のバラツキがあるが、おおづかみにいえば地質学の区分の更新世末にあたる。今日の話は、この中の最後のほうである。つまり、私たちの直接の祖先である新人（ホモ・サピエンス）がアフリカから世界各地に移動・拡散し、東アジア地域に到達したと考えられる約4万年前後から1万数千年前までに焦点をあてる。

1 研究の歩みの中の信州

第1段階：1949年に群馬県岩宿遺跡の発掘によって、日本列島の旧石器時代研究が開始された。それから10年足らずで日本各地にこの時期の石器の発見と調査が進み、基本的な地域編年が確立した（杉原1953、岸沢1954、岸沢1959）。日本の旧石器時代研究は、縄文時代をさかのぼるという問題意識の延長線上に展開したため、発見された石器群に土器が伴なわないので、「無土器時代」、縄文時代に先立つという意味で「先縄文時代」などが使われた。その後「先土器時代」、あるいは、最初に発見された遺跡名を冠して「岩宿時代」とよぶべきであるなどの問題提起もあった。しかし、発見されてきた膨大な石器資料とその数値年代（理化学的手法で出された年代）は、当該の時代がユーラシアの旧石器時代に相当することは間違いないことを明らかにした。そのため、今日では一般に「旧石器時代」の名称が使われている。

1949年～1960年代の前半までは、特徴的な石器の型式の地域的な偏りが次第に明らかになった段階である。つまり、石器群の編年の大枠の中で、指標的な石器の分布の地域差、特にナイフ形石器 Backed blade とよばれる石器の型式学的な特徴をもとに、地域差がはっきり把握される。この段階における信州の旧石器時代遺跡の調査は目覚ましいもので、1952年の諏訪市茶臼山遺跡の発掘を最初に、踊り場、上ノ平、馬場平、杉久保、矢出川、八島、中ッ原、男女倉、横倉、渋川、手長丘、神子柴、柳又などの遺跡が、壁を切ったように調査され、「壁をうちやぶったエネルギーは刮目に値するほどすばらしかった」（藤森1965）と表現されているほどである。

第2段階：1960年代の後半～1970年代。石器の素材となる母岩別・個体別の接合資料の発見と復原によって、一遺跡の石器群を可能な限り完全に把握しようとする方向に方法論上の進展が見られた。その起点となったのが1966年の埼玉県砂川遺跡の調査と報告（戸沢1968、戸沢・安藤・鈴木・矢島編1974）である。

その特徴をあげると次のようになる。

- 1) 一遺跡内で相互に離れていた石器・剥片類の複数のブロックが結合され、旧石器時代の比較的ゆるやかな同時性という時間幅のなかに極めて高い同時性の尺度を考古学独自の方法によって示すことが可能となった。
- 2) 接合関係によって石器の製作技法の復原がいっそう立体的におこなえるようになった。
- 3) 接合資料の空間的表現である一遺跡内の分布関係は、遺跡の構造の解明への道を切り開いた。
- 4) その遺跡で製作されたもの、搬入されたもの、搬出されたもの、これら三者の存在は、集団の規模、定着度、移動のサイクルなどに関する問題意識の前提を形成させた。

このように砂川遺跡で実践された個体別接合資料による石器分析の方法の意義は、分布としては一つの点にすぎない一遺跡の石器群の分析を徹底することで、一遺跡の構造を解明する視点を確立したことである。相互に連絡はなかったものの、日本とヨーロッパにおけるこうした分析方法の確立は、じつはほぼ同時だったのである。

1970年代の前半までには各種の理化学的な分析方法により、当時石器用の石材に使われた岩石のうち、安山岩（サスカイト）、黒曜石の产地推定が可能となった。信州や箱根の黒曜石原産地と南関東の黒曜石石材の消費地の間が、明確な理化学的根柢をもって結びつけることができるようになったのである（Suzuki 1973, 1974）。これは石器の分布の広がりについて、石材产地と遺跡（消費地）の間が、一本あるいは複数本の線によって動的に結びつけられたことを意味する。こうした研究史上的蓄積をまって、旧石器時代の住居・集落をとおして社会の関係を復原していく際の基礎が1970年代の中ごろに形成されたのである。以後、石器石材の多様な展開によって、集団の移動、移動の範囲、移動の様々な形態、集団の定着度などが議論されていく。

信州の黒曜石が新しい観点から見直され、膨大な分析と石器の詳細な分析が結びついで、全国的な動向と一体となって研究が展開することになったのである。

第3段階：1980年代～1990以降年代 信州の遺跡調査では方法論として、第四紀諸学との連携で矢出川遺跡群を中心とする野辺山高原の遺跡が調査されたことが大きな意味をもっているといえるであろう。また、黒曜石の分析が、当時の集団の移動問題と多様に結び付いておこなわれるようになった。信州の黒曜石がどこまで搬出され到達しているのか、また逆に信州の遺跡に各遠隔地の黒曜石や、信州にはない珪質頁岩などが少數ながら発見されることなどをとおして、旧石器時代の石材の動きは予想外に複雑であることが理解されたのである。さらに黒曜石の原産地群遺跡としての把握が次第に定着したことも特筆されよう。

1990年代はさまざまな大規模開発にともない、信州の旧石器時代遺跡群も、従来の調査規模からすれば100年かかっても調査しきれないくらいの広範囲の発掘が実施されている。それは『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』のシリーズを見るだけでも、その一端は充分に認識できよう。アウトバーンの建設とそれに伴うバイパス建設、そのほか関連の開発で、たとえば野尻湖周辺では湖底の立が鼻遺跡とはべつに野尻湖遺跡群として150箇所以上の遺跡が登録され、その中でも特に日向林B遺跡では機能部の刃部だけを磨いている斧形石器が60点にのぼるだけでなく、遺構としての環状ブロックをはじめ、後期旧石器前半期の常識を転換する事実が発掘されたのである（土屋・谷編2000）。

ヨーロッパのモデルでも、アジアのモデルでもこの現象はうまく説明できない。日本列島の現実、信州の具体的な遺跡からひろく世界に情報発信しなければならない事態になったのである。

第4段階：この段階の契機はきわめて残念ながら、2000年11月に暴露された旧石器捏造事件である

る。日本における考古学研究が大きく^{はずかし}められ、信用を失ったことは事実である。特に旧石器時代研究は汚辱のドープに叩き込まれた。竹佐中原遺跡の調査はこの中で実践された一つの貴重な成果で(大竹 2005)、評価はまだこれからだが、データの取り上げから検討の過程も含め、捏造問題の反省に立った真摯な調査研究が信州の地で実践されたことは、研究史の中で振り返って評価されることになると考える。

2 狩猟対象の動物と人類集団の関係

「よみがえる氷河時代の狩人」を実現するには、やはり方法の問題が重要である。以下にこの問題に限定して最小限を記してみる⁽¹⁾。野尻湖底立が鼻遺跡と日向林B遺跡を念頭に置く。立が鼻遺跡は、年代的に放射性炭素年代(AMS)の測定値で4万年前後である。日向林B遺跡よりも古いが、ナウマンゾウやオオツノシカの狩猟をリアルに考えるために、時間の前後関係はいま少し横において議論したい。

ナウマンゾウの移動の範囲とサイクルの推定:現生のゾウの生態においても、移動のパターンやサイクル、移動の範囲などについて統一像をつくりにくいので、絶滅したナウマンゾウの古生態にフィードバックすることがそもそも可能だろうか。現生のゾウと絶滅したゾウは別の動物であるが、現生のゾウの研究が過去の理解を助けるさまざまな教訓を与えてくれることも事実である。異なる分野の研究が相互に切り結ぶ実際の場では、なんらの実証的な観察記録もなしに頭のなかでひねり出した思いつきではなく、部分的ではあるが実証的な根拠にもとづいたモデルとして、移動の範囲とサイクルについて簡潔に仮説モデルをしてみよう。

モデル1:「後期更新世の酸素同位体ステージ(OIS あるいは MIS)の3の段階に、野尻湖周辺で狩猟採集活動を生業としていた人類集団とナウマンゾウの存在を前提に、ナウマンゾウの最大移動距離を160~200km程度であったと考える」

アフリカゾウの季節移動が140kmの例は、ボツワナのコベ国立公園とジンバブエのワング国立公園の間で観察され、南インドでも52kmの例がある。このことを根拠として、それよりも延長した距離を可能な範囲と想定する。想定した160kmは野尻湖と南関東の武藏野台地の直線距離であり、200kmは野尻湖から上田、小諸を通り碓氷峠をこえて安中、高崎、熊谷を経由して武藏野台地に到達する曲線の距離である。

酸素同位体ステージ2の最終氷期最寒冷期(LGM)ではないとはいえる、最終氷期であることに変わりはない、また移動の範囲は地形に強く影響されるので、アフリカのサヴァンナや南インドの例と同列に議論できないことはいうまでもない。日常的な行動圏(home range)も山地地形と谷地形に規定されて、基本的には南北に狭長になっていたと想定できる。野尻湖と南関東という設定にすると、関東平野を開む山地が障壁として問題となる。ゾウは習慣として、山岳地、砂漠、その他の大きな自然の障壁を越えることはないと言われているが、南インドの観察事例でゾウが急峻な丘陵地の数少ない峠を越えて回帰的に移動していく様子がとらえられている(Sukumar 1989)。

では、野尻湖から南下して南関東に移動する場合、どこを通ったのであろうか。野尻湖から、上田、小諸を経由して碓氷峠を越えた可能性が高いと考える。志賀高原から吾妻郡へ抜けるルートや、佐久から十石峠を越えて藤岡に抜けるルート、野辺山から東に山を越えて秩父に入るルートもないではないが、いずれも碓氷峠よりは急峻で山深く条件は良くない。碓氷峠を想定した場合、問題になるのは、浅間火山群の黒斑山がおよそ23,000年前に水蒸気爆発により山体の東半分が崩壊し、このとき塩沢

岩屑流が湯川をせき止め南軽井沢一帯に一時的な湖ができたことが湖成堆積物からわかっていることである（樋口 1988）。したがってこの時期の前後を除けば、碓氷峠のルートを考えやすいということになるだろう。

モデル2：「行動圏（home range）が野尻湖を含む一帯にあったナウマンゾウの個体群は、無雪あるいは、少雪の季節には野尻湖付近を棲息場所（habitat）としていたが、多雪あるいは冬の季節になると、無雪の場所に移動してそこを habitat とし、野尻湖付近に雪が消えるころには本来の home range に再び回帰するという移動のパターンをくり返していたと考える」

ゾウの移動に関しては、アジアゾウの例で R. スクマールによって季節的な移動の実態が高精度に観察された。それによると、降水量と分散・移動とは相関があるとみてよいだろう。ただ、なにゆえ長距離移動がおこなわれるのかについては解明されていない。雨期との相関関係があるという点にとどまる。

最終氷期の酸素同位体ステージの3の野尻湖と、現在のアフリカ、南インドで最も異なるのは、もちろん雪氷の問題である。つまり、棲息場所や日常的な行動圏がすっぽりと厚い雪に覆われた場合、ゾウの生息条件は著しく悪くなるかあるいは不可能となる。どの程度の積雪までは棲息が可能かはむろんはっきりしていない。

南インドのアジアゾウの食べる草の消費量を調査した例では、平均 1800 kg の体重のゾウ一頭で一日平均 27.00 kg が記録されている（Sukumar 1989）。野尻湖のナウマンゾウの一頭当たりの一日平均の草・木の葉・木の皮などの消費量がこの値とそれほど乖離していないと仮定すると、十数頭の個体群の単位で考えても、深く冠雪した場所での個体群の維持は困難であろう。したがって、雪がないかきわめて少ない地への長距離移動は、野尻湖のナウマンゾウの個体群の場合、棲息困難な条件を避けて移動するという点で、移動の要因にみる雪との相関関係は、同時に明確に因果関係で理解しうるものである。

野尻湖ではナウマンゾウとともにオオツノシカが共存していた。この大形草食動物の食性が推定できる例が、わずかであるが野尻湖底立が鼻遺跡で認められている。中部野尻湖層Ⅱの紫灰色中粒砂層から出土した、草食性大形動物の糞の可能性の高い「糞石様植物片集合体」を分析した那須孝悌氏によると、これはハシバミやシラカバの花粉が充分に成熟してはいるものの、まだ開花していない早春に、枯れ葉のついたハシバミの枝やシラカバの小枝を、シカ類（オオツノシカ）が食べた結果であると推定できるという（那須 1991）。

したがって、ナウマンゾウについてもこうした食性を考えてなんら矛盾はないが、当時の野尻湖周辺における早春の生物体量（biomass）が、それを可能にしたかどうかが問題となり、早春にオオツノシカとともにナウマンゾウが実際に共生したかどうかは未だわかっていない。

ナウマンゾウが、冠雪した場所を行動圏とすることは困難で、雪のない地域に移動したとすることは言いうるとしても、それは一つの想定である。したがって、この仮説はいずれかの方法で肯定的にせよ、否定的にせよテストされる可能性がなければならない。

ナウマンゾウの臼歯の成長線を使って死亡時期を推定することができることが前提であるが、一種の消去法でテストすることは可能であろう。自然死でも人による狩猟でも、その原因に関係なく、春・夏・秋に死亡したことが推定され、冬に死亡した証拠が得られなければこの仮説は支持され、逆に冬

の死亡が推定されればこの仮説は否定される。

以上を簡潔にまとめると、行動圏が野尻湖を含む一帯にあったナウマンゾウの個体群は、無雪あるいは少雪の季節には野尻湖付近を棲息地としていたが、多雪あるいは冬の季節には百数十km前後の移動をおこなって関東を棲息地とし、野尻湖付近に雪が消えるころには本来の行動圏と棲息場所に再び回帰する、というパターンを仮説として提起できるであろう。もちろん、この場合の野尻湖の範囲には日向林B遺跡の場所なども含まれると考えるべきである。

かつて旧石器時代の集団の離合集散を、陸棲大形哺乳動物の季節的移動を一つの契機として説明しようとする問題提起がなされた（春成 1976）。しかし、ナウマンゾウをはじめとする大形動物の古生態に関する復原研究は進捗せず、この問題は具体的に前進してこなかったのである。その後、1980年代に始良 Tn 火山灰（町田・新井 1992）の降灰以前の時期に、立川ローム層の第二黒色帶中に環状ブロックとよばれる特徴的な遺物分布が知られるようになった。

群馬県の下触牛伏遺跡はその典型例として著名である（岩崎 1986、中島・輕部 1993）。同様の遺跡は群馬県で 10 遺跡以上発見されている（関口・櫻井・津島 1993）。下触牛伏遺跡の環状ブロックの形成は比較的短時間であり（栗島 1993）、環状ブロックが形成された背景は、南関東方面から回遊してくるナウマンゾウなどの大形動物群に対する大規模狩猟活動がその契機であったろうと問題提起された（大工原 1993）。こうした遺跡は野尻湖底立が鼻遺跡でナウマンゾウが出土する層準よりもやや新しい後期旧石器時代であるが、酸素同位体のステージでは同じ 3 の時期である。

ナウマンゾウの移動のルートが碓氷峠の可能性が高いとするならば、峠を越えて往復するナウマンゾウの個体群の狩猟を考えるには、地理的な位置も遺跡の規模も、形成期間も整合的である。野尻湖立が鼻遺跡と同時期の複数の遺跡をもとにして、当時の人類集団とナウマンゾウの関係的具体像を描き出すまでには未だ道は遠いと言わざるをえない。ナウマンゾウの骨を素材とした打製骨器も後期旧石器の段階までどの程度残存するのかも不明のままであり、日本列島の中でこの課題を解決するのは時間がかかりそうである。アフリカゾウとアジアゾウの現生態の観察記録からどの程度の共通項を抽出でき、それがどの程度のテスト可能な仮説としてモデル化できるか、現時点で可能な範囲で考えてみた次第である。

注：本稿の「2 狩猟……」以下の記述は、小野 昭 2001 「打製骨器論—旧石器時代の探求—」 東京大学出版会 第9章中の関連部分を要約して記したものである。

文献：

- 岩崎泰一 1986 「下触牛伏遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大竹憲昭 2005 「長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化」 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 75.
- 栗島義明 1993 「環状ブロックの構成」「環状ブロック群 資料集」 pp.40-43. 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会
- 芹沢長介 1954 「関東および中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察」『職台史学』 4: 65-106.
- 芹沢長介 1959 「ローム層に潜む文化」『世界考古学大系』 1 平凡社.
- 杉原莊介 1953 「日本における石器文化の階梯について」『考古学雑誌』 39-2: 21-25.
- 大工原 壽 1993 「環状ブロック群が形成された背景—離合集散の要因について—」『環状ブロック群資料集』 pp.36-38. 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会

- 岡口博幸・櫻井美枝・津島秀章 1993 「下触牛伏遺跡とその分析」『環状ブロック群資料集』 pp.15-27. 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会
- 土屋 積・谷 和隆 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 15』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 48.
- 戸沢充則 1968 「埼玉県砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊』 4-1: 1-42.
- 戸沢充則・安藤政雄・鈴木次郎・矢島國雄（編） 1974 『埼玉県所沢市砂川先土器時代遺跡—第二次調査の記録—』所沢市教育委員会
- 中島 誠・釋部達也 1993 「下触牛伏遺跡とその分析」『環状ブロック群 資料集』 pp.6-14. 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会
- 那須孝悌 1991 「ナウマンゾウをめぐる古環境」『日本の長鼻類化石（亀井節夫編著）』 pp.170-177. 禁地書館
- 春成秀爾 1976 「先土器・縄文時代の画期について（1）」『考古学研究』 22 (4) : pp.68-92.
- 樋口和雄 1988 「御代田町の自然環境と地質」鉢師屋遺跡群「十二遺跡発掘報告書」 pp.13-19. 御代田町教育委員会
- 藤森栄一 1965 「中部地方南部の先土器時代」『日本の考古学』 I (先土器時代) 杉原編 河出書房 pp.264-283.
- 町田 洋・新井房夫 1992 『火山灰アトラス』東京大学出版会
- Sukumar, R. 1989 The Asian Elephant ecology and management. Cambridge University Press, Cambridge.
- Suzuki, M. 1973 Chronology of prehistoric human activity in Kanto, Japan. Part I. Journal of the Faculty of Science. The University of Tokyo, Sec.V. Vol. IV. Part 3. 341-318.
- Suzuki, M. 1974 Chronology of prehistoric human activity in Kanto, Japan. Part II. Journal of the Faculty of Science. The University of Tokyo, Sec.V. Vol. IV. Part 4. 395-469.

展示資料一覧

資料番号	資料名	出土遺跡名	遺跡所在	種別	数量	備考	所蔵
1	旧石器ねつ造事件報道新聞ほか						個人蔵
2	オオツノシカ骨格標本			骨格模型	1		松本市立博物館
3	ヤベオオツノシカ化石		安曇野市吐中	化石実物	2		松本市立博物館
4	オオツノジカ頭骨		ヨーロッパ	化石実物	1		松本市立博物館
5	インドの前期旧石器	マドラス遺跡	インド	石器	5		明治大学博物館
6	中国の中期旧石器	丁村遺跡	中華人民共和国	石器複製	5		明治大学博物館
7	縄文文化以前の石器文化の存在を証明した石器	岩宿遺跡	群馬県みどり市	石器	7	重要文化財	明治大学博物館
8	長野県最古級の石器	竹佐中原遺跡A地点	飯田市	石器	14		長野県埋蔵文化財センター
9	長野県最古級の石器	石子原遺跡	飯田市	石器	10		長野県教育委員会
10	長野県最古級の石器	がまん淵遺跡	中野市	石器	8		長野県立歴史館
11	長野県最古級の石器・骨角器	立が鼻遺跡	信濃町	複製	4		長野県立歴史館
12	東北地方最古級の石器	金取遺跡	岩手県遠野市	石器	7	遠野市指定文化財	遠野市教育委員会
13	日本前期旧石器時代とされる石器	星野遺跡	栃木県栃木市	石器	8		東北大考古学研究室
14	日本前期旧石器時代とされる石器	早水台遺跡	大分県日出町	石器	7		東北大考古学研究室
15	南関東最古級の石器	中山谷遺跡	東京都小金井市	石器	13		東京都教育委員会
16	東海地方最古級の石器	井出丸山遺跡	静岡県沼津市	石器	9		沼津市文化財センター
17	東海地方最古級の石器	濱ヶ沢遺跡(第2東名No.27-3)	静岡県沼津市	石器	9		沼津市文化財センター
18	東海地方最古級の石器	富士石遺跡(第2東名No.143)	静岡県長泉町	石器	23		静岡県埋蔵文化財調査研究所
19	東海地方最古級の石器	追平B遺跡	静岡県長泉町	石器	11		長泉町教育委員会
20	斧形石器・台形石器	日向林B遺跡	信濃町	石器	36	長野県宝	長野県立歴史館
21	斧形石器・ナイフ形石器	貫ノ木遺跡第3地点	信濃町	石器	17		長野県立歴史館
22	斧形石器・ナイフ形石器	大久保南遺跡	信濃町	石器	7		長野県立歴史館
23	ナイフ形石器・彫器ほか	杉久保遺跡	信濃町	石器	10		野尻湖ナウマンゾウ博物館
24	ナイフ形石器・彫器	七ツ栗遺跡	信濃町	石器	9		長野県立歴史館
25	ナイフ形石器	上ノ平遺跡C地点	新潟県阿賀町	石器	10	新潟県指定文化財	新潟県埋蔵文化財事業団
26	ナイフ形石器	裏ノ山遺跡	信濃町	石器	9		長野県立歴史館
27	ナイフ形石器	寺尾遺跡第VI文化層	神奈川綾瀬市	石器	10	神奈川県指定文化財	神奈川県教育委員会
28	ナイフ形石器	砂川遺跡	埼玉県所沢市	石器	6	重要文化財	明治大学博物館
29	ナイフ形石器・輪先形尖頭器	西岡A遺跡	信濃町	石器	13		長野県立歴史館

資料番号	資料名	出土遺跡名	遺跡所在	種別	数量	備考	所蔵
30	国府型ナイフ形石器	東裏遺跡	信濃町	石器	6		長野県立歴史館
31	国府型ナイフ形石器	南花田遺跡	大阪府堺市	石器	8		大阪府埋蔵文化財センター
32	国府型ナイフ形石器	長原遺跡	大阪府大阪市	石器	5		大阪市文化財協会
33	ナイフ形石器・剥片尖頭器	東裏遺跡	信濃町	石器	11		長野県立歴史館
34	ナイフ形石器・槍先形尖頭器	男女倉遺跡第I地点	長和町	石器	20		信州大学
35	ナイフ形石器・槍先形尖頭器	男女倉遺跡B地点	長和町	石器	18		長和町教育委員会
36	縦長剥片・石核	鷹山遺跡群第I遺跡M地点	長和町	石器	13		長和町教育委員会
37	槍先形尖頭器	貫ノ木遺跡第1地点	信濃町	石器	6		長野県立歴史館
38	大型石刃・削器	白滝遺跡群	北海道紋別郡遠軽町	石器	10		北海道埋蔵文化財センター
39	大型尖頭器	白滝遺跡群	北海道紋別郡遠軽町	石器	12		北海道埋蔵文化財センター
40	細石刃・細石刃核	矢出川遺跡群	南牧村	石器	20		個人蔵
41	細石刃到着復元資料			復元製作	1		個人蔵
42	細石器	白滝遺跡群	北海道紋別郡遠軽町	石器	28		北海道埋蔵文化財センター
43	石槍・石斧ほか	神子柴遺跡	南箕輪村	複製	15		長野県立歴史館
44	石槍・石斧ほか	唐沢B遺跡	上田市	石器	10	長野県宝	上田市教育委員会
45	槍先形尖頭器	下茂内遺跡	佐久市	石器	8	長野県宝	長野県立歴史館
46	石斧・削器・石刃ほか	大平山元I遺跡	青森県外ヶ浜町	石器	12	外ヶ浜町指定文化財	外ヶ浜町教育委員会
47	無文土器	大平山元I遺跡	青森県外ヶ浜町	石器	4	外ヶ浜町指定文化財	外ヶ浜町教育委員会
48	隆起線文土器	貫ノ木遺跡	信濃町	土器	21		野尻湖ナウマンゾウ博物館
49	隆起線文土器	福井洞穴遺跡	長崎県佐世保市	土器	6		東北大学考古学研究室
50	細石刃・細石刃核	福井洞穴遺跡	長崎県佐世保市	石器	15		東北大学考古学研究室
51	隆起線文土器	前田耕地遺跡	東京都あきる野市	土器	4	重要文化財	東京都教育委員会
52	石槍	前田耕地遺跡	東京都あきる野市	石器	12	重要文化財	東京都教育委員会
53	隆起線文土器	中島B遺跡	岡谷市	土器	11		長野県立歴史館
54	槍先形尖頭器ほか	中島B遺跡	岡谷市	石器	12		長野県立歴史館
55	隆起線文土器	星光山荘B遺跡	信濃町	土器	6		長野県立歴史館
56	石斧・尖頭器	星光山荘B遺跡	信濃町	石器	14		長野県立歴史館
57	狩人たちのくらしたイエ		群馬県みどりの市	模型	1		岩宿博物館
資料総数					580		

主な参考文献

- 安斎正人・佐藤宏之編『旧石器時代の地域編年の研究』同成社
- 橋田孝司 2001「遊動する旧石器人」先史日本を復元する I 岩波書店
- 岩宿博物館 2006『岩宿時代はどこまで遡れるか』第42回企画展図録
- 岩宿博物館 2008『岩宿人のくらしをさぐる 学習シート』
- 大竹憲昭 2002「黒曜石の流通と中部高地の原産地」『黒曜石文化研究』創刊号 明治大学黒曜石研究センター
- 大竹憲昭 2007「二つの環状ブロック群」『長野県立歴史館研究紀要』第13号
- 大竹憲昭 2007「野尻湖に集う人びと」「信濃の風土と歴史13 あきなう人びと」長野県立歴史館
- 岡本東三編『季刊考古学 特集 繩文文化の起源を探る』第83号 雄山閣
- 小野 昭 2007『旧石器時代の日本列島と世界』同成社
- 笠懸野岩宿文化資料館 2001『日本人のルーツを探る』
- 小菅将夫 2006『赤城山麓の三万年前のムラ 下触牛伏遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」30 新泉社
- 黒曜石体験ミュージアム 2004『黒曜石の原産地を探る 鷹山遺跡群』シリーズ「遺跡を学ぶ」別冊1 新泉社
- 国立科学博物館 2001「日本人はるかな旅展」
- 白石浩之 2002『旧石器時代の社会と文化』日本史リブレット1 山川出版社
- 谷 和彦 2007「野尻湖遺跡群における先土器時代石器群の変遷」『長野県立歴史館研究紀要』第13号
- 直江康雄 2008「白滝産黒曜石の獲得とその広がり」「日本旧石器学会第6回講演・研究発表シンポジウム予稿集」日本旧石器学会
- 中村由克 1995「長野・新潟における石器石材について」「第3回岩宿フォーラム／シンポジウム石器石材予稿集」岩宿文化資料館
- 長野県埋蔵文化財センター 2005「竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書75
- 日本旧石器学会編 2003「日本旧石器学会第1回シンポジウム予稿集 後期旧石器時代のはじまりを探る」日本旧石器学会
- 日本考古学協会編 2003「前・中期旧石器問題の検証」
- 日本第四紀学会・小野 昭・春成秀爾・小田静夫編 1992「図説・日本の人類遺跡」東京大学出版会
- 野尻湖ナウマンゾウ博物館 2003『ナウマンゾウの狩人をもとめて』
- 柳田俊雄・小野章太郎 2007「大分県早水台遺跡第6・7次発掘調査の研究報告」『Bulletin of the Tohoku University Museum』No. 7

謝 辞

今回の企画展を開催するにあたり、下記の方々、および関係機関にご協力を賜りました。ここに記して感謝の意を表します（50音順、敬称は略させていただきました）。

会田 進、阿子島 香、市川健夫、稻田孝司、一ノ瀬幸治、大竹幸恵、小野 昭、菅野智則、菊池強一、絹川一徳、國平健三、倉沢正幸、黒田篤史、河野喜映、小菅将夫、駒田 透、笠原千賀子、品田康子、渋谷恵美子、島田和高、鈴木次郎、高尾好之、竹尾 進、谷 和隆、堤 隆、鶴田典昭、直江康雄、並木 仁、西沢寿晃、羽生俊郎、広瀬高文、三宅正浩、森泉哲次、柳田俊雄、山科 哲、山本 肇、吉田政行

飯田市教育委員会、岩宿博物館、上田市教育委員会、上田市立信濃国分寺資料館、遠軽町教育委員会、大阪府文化財調査事務所、大阪市文化財協会、神奈川県教育委員会、神奈川県埋蔵文化財センター、静岡県埋蔵文化財調査研究所、信州大学医学部、外ヶ浜町教育委員会、千曲川水系古代文化研究所、東京都教育委員会、東京都埋蔵文化財センター、東北大学考古学研究室、遠野市教育委員会、長泉町教育委員会、長和町教育委員会、長野県埋蔵文化財センター、新潟県教育委員会、新潟県埋蔵文化財調査事業団、沼津市文化財センター、野尻湖ナウマンゾウ博物館、北海道埋蔵文化財センター、松本市立博物館、明治大学博物館、明治大学黒耀石研究センター

平成20(2008)年度 秋季企画展図録
よみがえる氷河時代の狩人

平成20(2008)年 9月25日発行

編集発行 長野県立歴史館
〒 387-0007 長野県千曲市屋代字清水 260-6
科野の里歴史公園内
電話 026-274-2000㈹

印 刷 株式会社プラルト
〒 399-0033 長野県松本市大字兼賀 5985
電話 0263-28-8000



Nagano Prefectural Museum of History